



一般社団法人
日本オリエント学会



第60回大会 研究発表要旨集

60th

2018年10月13日（土）、14日（土）
京都大学吉田キャンパス

目次

日本オリエント学会第 60 回大会プログラム……………	2
第 2 日 [10 月 14 日 (日)] 研究発表会 部屋・時間割……………	3
第 1 部会……………	7
第 2 部会……………	18
第 3 部会……………	28
第 4 部会……………	39
第 5 部会……………	49
第 6 部会……………	58
企画セッション……………	65
ポスター発表……………	67
会場アクセス・地図……………	74

日本オリエント学会第60回大会プログラム

2018年10月13日(土)・14日(日)

主催：日本オリエント学会 会場：京都大学吉田キャンパス

第1日 10月13日(土) 14:00～20:00

＊公開講演会（共催：京都大学イスラーム地域研究センター）

会場：京都大学吉田キャンパス文学部校舎2階第3講義室

13:30 開場

14:00～14:10 開会挨拶

14:10～17:00 第321回公開講演会「オリエント世界の王権」

第1講演：柴田大輔（筑波大学）

「古代メソポタミアの王権—神々、王、知識人—」

第2講演：森本公誠（東大寺）

「前近代イスラム期の王権とカリフの実像」

第3講演：小杉泰（京都大学）

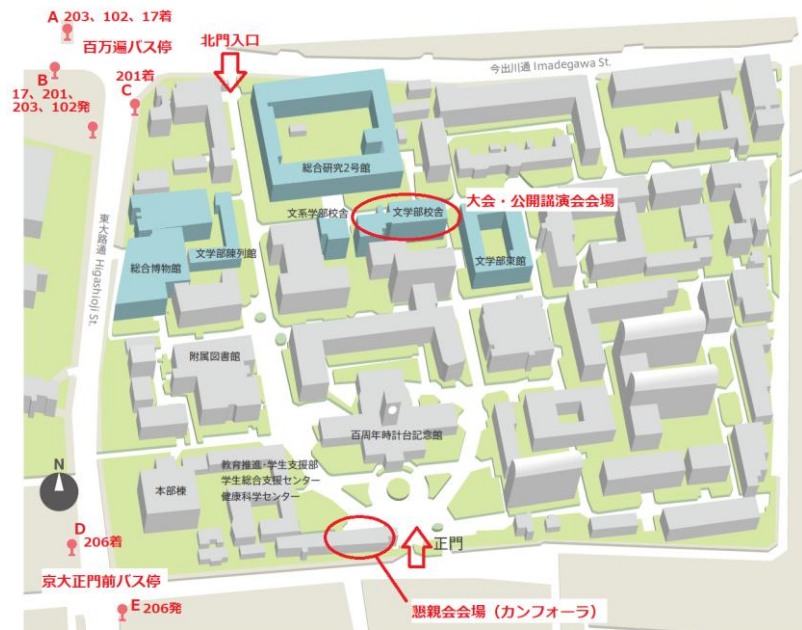
「現代中東における君主制とイスラーム」

18:00～20:00 懇親会（会場：吉田キャンパス正門近く「カンフォーラ」）

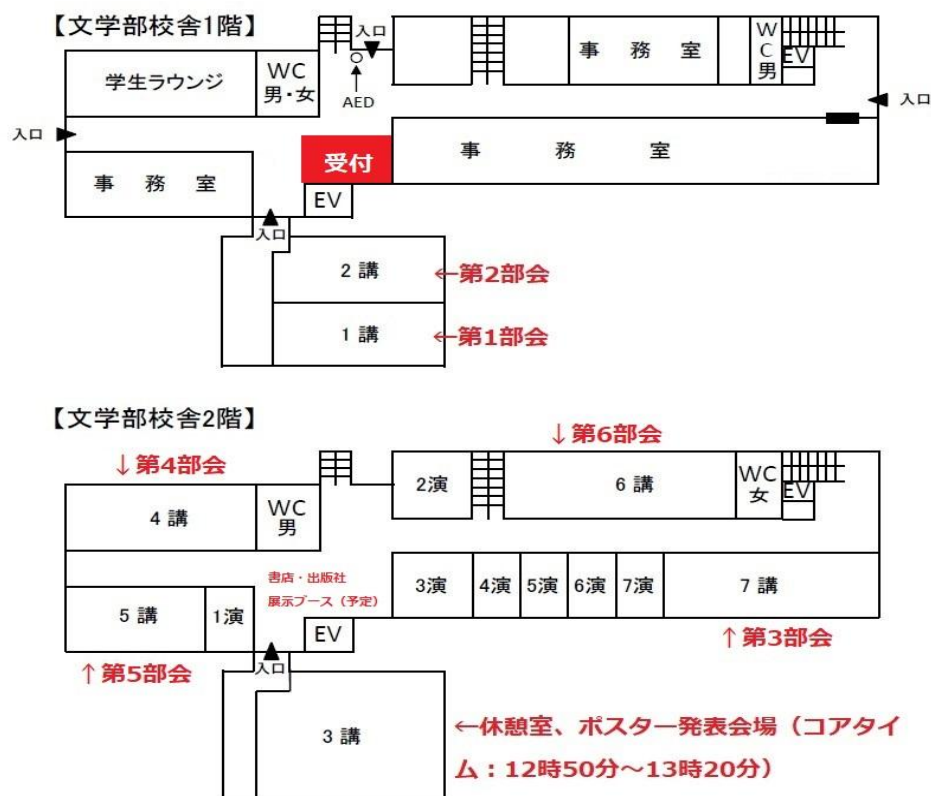
第2日 10月14日(日) 10:00～17:00

＊研究発表会

会場：京都大学吉田キャンパス文学部校舎1階第1～2講義室、2階第3～7講義室



第2日 [10月14日(日)] 研究発表会 部屋割・時間割 (10:00～17:00)



第1部会 第1講義室(1階) (発表時間 20 分、質疑応答 5 分、予鈴は 1 鈴 15 分、2 鈴 18 分、3 鈴 20 分で鳴ります)

	時間	発表者	発表題目
1	10:00～10:25	安倍雅史・後藤健・ 西藤清秀・上杉彰 紀・堀岡晴美・原田 怜・間舎裕生	バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト第 4 次調査の報告
2	10:30～10:55	細田あや子	メソポタミアのアーシブによる儀礼
3	11:05～11:30	村井伸彰	アクル文書の行政的文脈について
4	11:35～12:00	山本 孟	ヒッタイト王国による東西の辺境支配について—アナトリア西部 の支配を中心に—
昼食休憩(休憩室:2 階第 3 講義室)			
P	12:50～13:20	ポスター発表コアタイム(2 階第 3 講義室)	
5	13:30～13:55	山田雅道	王 vs. 市神—エマル文書における「主」とは誰か—
6	14:00～14:25	佐野克司	アッシリアの大規模強制移住政策を再考する
7	14:30～14:55	青島忠一朗	シャルマネセル 3 世の年代記における治世第 28 年の遠征記 事の役割
8	15:05～15:30	渡辺和子	『エサルハドン王位継承誓約文書』にみる条件節の用法を再考 する
9	15:35～16:00	渡辺千香子・Jamie Novotny	アッシェルバニパルの王宮浮彫に表現されたライオンに関する 考察
10	16:05～16:30	高橋優子	「エサルハドン王位継承誓約文書(ESOD)」の「申命記(Dt.)」 への影響—直接的文学的引用関係の痕跡を探る—
11	16:35～17:00	長尾琢磨	エルサレムにおけるヘレニズム化—石切墓の形態から—

第2部会 第2講義室(1階) (発表時間 20 分、質疑応答 5 分、予鈴は 1 鈴 15 分、2 鈴 18 分、3 鈴 20 分で鳴ります)

	時間	発表者	発表題目
1	10:00～10:25	西秋良宏	ザグロス地方中期旧石器時代石器群の変異
2	10:30～10:55	前田 修	クルディスタン原新石器時代における押圧剥離石刃製作の開始について
3	11:05～11:30	西山伸一	西アジア鉄器時代集落の構造的考察—北メソポタミアおよびレヴァント地方における「都市」と「村落」クラス集落の比較から—
4	11:35～12:00	関廣尚世・Elgazafi Yousif Eshhag	『古代スーダンの鉄製品に関する研究試論』—スーダン国立博物館所蔵資料から—
昼食休憩(休憩室:2 階第 3 講義室)			
P	12:50～13:20	ポスター発表コアタイム(2 階第 3 講義室)	
5	13:30～13:55	上杉彰紀	広域測量による南インド巨石文化遺跡の検討
6	14:00～14:25	米山由夏	古代エジプト、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の単純埋葬の埋葬方法に関する一考察
7	14:30～14:55	横山 操	京都大学総合博物館エジプト考古資料 コプト織物について
8	15:05～15:30	坂本 翼	イシス信仰の終焉—ヘサ島の再評価を中心に—
9	15:35～16:00	Mohamed Soliman	Spatializing the Topography of Islamic Alexandria-Historic Maps via Remote Sensing and GIS
10	16:05～16:30	杉本智俊	十字軍期南レヴァント地域における農業集落の性格—ベイティン村発掘調査の成果に基づいて—

第3部会 第7講義室(2階) (発表時間 20 分、質疑応答 5 分、予鈴は 1 鈴 15 分、2 鈴 18 分、3 鈴 20 分で鳴ります)

	時間	発表者	発表題目
1	10:00～10:25	中野智章	エジプト第1王朝のサッカラ墓地における付属墓について
2	10:30～10:55	柏木裕之	クフ王第 2 の船の木材搬入方法について
3	11:05～11:30	山田綾乃	番付分析を用いたクフ王第 2 の船甲板梁の配置に関する検討
4	11:35～12:00	矢澤 健・吉村作治	エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代における葬制の特質とその背景
昼食休憩(休憩室:2 階第 3 講義室)			
P	12:50～13:20	ポスター発表コアタイム(2 階第 3 講義室)	
5	13:30～13:55	石崎野々花	エジプト新王国時代、黒色木棺の編年に関する一考察
6	14:00～14:25	河合 望	ヘリオポリス出土のトゥトアଙ୍କアメン王銘入りレリーフ・ブロックについて
7	14:30～14:55	野中亜紀	アマルナ時代の音楽に関する一考察—TUT's Trumpets の分析・考察を通して—
8	15:05～15:30	高橋寿光	古代エジプト、青色彩文土器の生産地の変遷について
9	15:35～16:00	和田浩一郎	アコリス遺跡出土の「結びの護符」
10	16:05～16:30	安岡義文	末期王朝時代のエジプトにおける人体像のプロポーションに関する解釈について
11	16:35～17:00	田澤恵子	古代エジプトのファイアンス製ウシェブティに関する新たな様式分析への一試案—通称「キャンベル墓」(ギザ)出土のウシェブティからわかること—

第4部会 第4講義室(2階) (発表時間 20 分、質疑応答 5 分、予鈴は 1 鈴 15 分、2 鈴 18 分、3 鈴 20 分で鳴ります)

	時間	発表者	発表題目
1	10:00～10:25	榮谷温子	クルアーン 18 章 38 節と 34 章 27 節の「事柄の代名詞」について
2	10:30～10:55	竹田敏之	クルアーン正書法とラスム学の確立—マグリブ・アンダルス学派の形成を中心に—
3	11:05～11:30	村上武則	クルト語クルマンジー方言のエザーフェと関係代名詞
4	11:35～12:00	五十嵐小優粒	書き言葉におけるペルシア語受身の出現様相—日・英・仏と比較して—
昼食休憩(休憩室:2 階第 3 講義室)			
P	12:50～13:20	ポスター発表コアタイム(2 階第 3 講義室)	
5	13:30～13:55	春田晴郎	イランにおける「都市」を表わす語の変遷
6	14:00～14:25	四角隆二	サーサーン朝カット・ガラスに関する一考察
7	14:30～14:55	津村眞輝子	境界を越える金属貨幣の実態—サーサーン朝ペルシアの事例を中心に—
8	15:05～15:30	Begmatov Alisher	ムグ山文書の言語的特徴
9	15:35～16:00	土谷遙子	法顕が巡礼した『陀歴』(ダレル)に至るパミールからの四つの道筋—パキスタン北部地方『法顕の道』現地調査(1991 - 2015)—
10	16:05～16:30	下山繁昭	『隋書』倭国伝にみる謎の王朝の存在—日本の歴史から忘れ去られた王—

第5部会 第5講義室(2階) (発表時間 20 分、質疑応答 5 分、予鈴は 1 鈴 15 分、2 鈴 18 分、3 鈴 20 分で鳴ります)

	時間	発表者	発表題目
1	10:00～10:25	田中悠子	アラビア語伝記史料における「ズインディーク」文人像の変遷—叙述における主題のとしての「異端(者)」の機能—
2	10:30～10:55	辻 大地	アッバース朝期イスラーム社会における「性的倒錯者」
3	11:05～11:30	大塚 修	普遍史書としての『バナーカティー史』—『集史』の呪縛から離れて—
4	11:35～12:00	角田哲朗	マフディーかく語りき—サイド・ムハンマド・ムシャアシャアのマフディー自称論理—
昼食休憩(休憩室:2 階第 3 講義室)			
P	12:50～13:20	ポスター発表コアタイム(2 階第 3 講義室)	
5	13:30～13:55	久保亮輔	マムルーク朝期カイロにおける施設経営の実態
6	14:00～14:25	手島秀典	マムルーク朝末期における有力アミールの昇進過程—スルターン・カーイトバーイ治世期における政府要職就任者の経歴に関する考察—
7	14:30～14:55	小澤一郎	19 世紀末イランの兵員簿の検討—イランにおける「軍隊の社会史」研究に向けて—
8	15:05～15:30	阿部克彦	松浦家伝来渡来上着にみられるサファヴィー朝期織物について
9	15:35～16:00	坂田 舜	ネズィヘ・ムヒッディン(1889-1958)の論説に見る「トルコ人女性」

第6部会 第6講義室(2階) (発表時間 20 分、質疑応答 5 分、予鈴は 1 鈴 15 分、2 鈴 18 分、3 鈴 20 分で鳴ります)

	時間	発表者	発表題目
1	10:00～10:25	柳橋博之	イスナードの定量的分析の試み
2	10:30～10:55	Khashan Ammar	アブー・ハニーファの『ムスナド』をめぐる論争と評価ーハディース学から見たハナフィー法学派ー
3	11:05～11:30	堀井聡江	初期イスラーム法学における 12 イマーム派とスンナ派の学説的関係の一考察ー選択権を中心にー
4	11:35～12:00	矢口直英	議論の場としての『医学典範』注釈ークトゥブッディーン・シーラーズィー『サアドへの献呈書』ー
昼食休憩(休憩室:2 階第 3 講義室)			
P	12:50～13:20	ポスター発表コアタイム(2 階第 3 講義室)	
5	13:30～13:55	尾崎貴久子	モンゴル時代の漢語イスラム医学書『回回薬方』の外科治療記述についてー第 34 卷金瘡門折傷門を中心にー
6	14:00～14:25	末野孝典	西アフリカにおけるイブン・アラビー思想の影響に関する一考察ーイブラーヒーム・ニヤースの著作群を事例にー
7	14:30～14:55	齋藤正憲	バングラデシュの呪術師ー成巫過程における夢の役割ー
8	15:05～17:00	企画セッション: イスラーム王朝の正統性ー古典的枠組みを越えてー 亀谷学「アッバース朝期におけるカリフ観の変容」 佐藤健太郎「西方のカリフ政権とイブン・ハルドゥーン」 森本一夫「モンゴル支配期以降のペルシア語文化圏における統治の正統性と政治的権威ー近年の研究動向ー」 討論者・コメンテーター:近藤信彰	

ポスター発表:コアタイム 12:50～13:20 第3講義室(2階)

※当日午前中にポスターの掲示作業を完了してください。

※各発表者の方は、コアタイムの冒頭で 1 分間のショートトークをお願いします。

	発表者	発表題目
1	坂本 翼・銭廣健人	岡島誠太郎の再評価
2	山田綾乃・柏木裕之	クフ王第 2 の船における舷牆と甲板梁・桁の構造と収まり
3	関廣尚世・Elgazafi Yousif Eshhag	『埃及スーダン発見彩色土器の研究』ー京都大学総合博物館所蔵資料からー
4	高橋寿光・阿部善也	エジプト、ルクソール、マルカタ王宮出土の青色彩文土器の X 線分析
5	中野智章	京都大学総合博物館所蔵の古代エジプト資料
6	近藤二郎・河合 望・柏木裕之・高橋寿光	エジプト、ルクソール西岸新王国時代岩窟墓の調査研究ーアル=コーカ地区における 2017 年度(第 11 次)調査ー
7	伊藤早苗	エサルハドンとアッシュルバニパル治世における学者ならびに書記のネットワーク分析

バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト第 4 次調査の報告

後藤 健（東京国立博物館）
西藤 清秀（奈良県立橿原考古学研究所）
安倍 雅史（東京文化財研究所）
上杉 彰紀（金沢大学）
堀岡 晴美（国士舘大学イラク古代文化研究所）
原田 怜（東京藝術大学）
間舎 裕生（東京文化財研究所）

ディルムンは、メソポタミアの文献資料に登場する周辺国の 1 つである。この王国は、前 2 千年紀前半に、メソポタミアとマガン、インダスを結ぶペルシア湾の海上交易を独占し繁栄したことが知られている。

南メソポタミアには、ディルムンの商人の手によって、銅や錫、砂金、象牙、ラピスラズリ、カーネリアン、木材（黒檀など）、真珠など大量の物資が運びこまれていた。いわば、物流の面からメソポタミア文明を支えたのが、このディルムンであった。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーンがディルムンに比定されている。

筆者らは、2014 年 4 月から「バハレーン・ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト」を実施している。本プロジェクトの目的は、ディルムンの起源を明らかにすること、すなわちバハレーンでどのように社会が複雑化し、権力が発達し、ペルシア湾の海上交易を独占するに至ったかを考古学的に解明することである。

ワーディー・アッ＝サイルは、バハレーン島内陸部を南から北へと流れる潤れ川である。この潤れ川の両岸に無数の古墳が分布しており、ワーディー・アッ＝サイル古墳群と呼ばれている。

この古墳群は、前 2250 年から前 2050 年に年代付けられており、2007 年にデンマーク隊が、ディルムン「最古のエリート墓」を発見・発掘したことから現在、学界で注目を集めている遺跡である。

ワーディー・アッ＝サイル古墳群は、古代ディルムンの起源を研究する上で、最適の遺跡であり、筆者たちは、デンマーク隊の後を引き継ぎ、発掘調査を実施している。

筆者たちは、2018 年の 1 月、2 月に、第 4 次ミッションを派遣し、古墳群の発掘調査を実施した。本発表では、この第 4 次調査の諸成果を報告する。

メソポタミアのアーシプによる儀礼

細田 あや子（新潟大学）

メソポタミアのアーシプ (*āšipu*) という職能者について、昨今研究が進んでいる。アーシプと対になって議論されるアスー (*asû*) という職種とあわせて、それらの定義が再考されている。アーシプは *exorcist*、アスーは *physician* と訳されることが多いが、それぞれこの英単語だけでは包括しきれない事柄を行っていたと考えられる。

アーシプの行った儀礼を考察して、アーシプの特徴を明らかにすることが主要な課題となる。そこで本発表では像、造形物にかかわる儀礼を考察することによって、アーシプの職能の一端を検討する。「口洗い（ミース・ピー）」儀礼では、神像が生きた神へと変容してゆくが、この通過儀礼でアーシプが果たす役割はきわめて重要である。また、アーシプ自身が神々や動物、異形の存在などの小像を制作し、それらを建築物の基層部分や地下に埋めた儀礼がある。さらに像を用いた儀礼が認められる。また、アーシプは護符（アミュレット）を作っていたと考えられる。これらの像や護符などにより、悪や災いが家屋のなかへ入ることが回避され、家や個人が守られる。

このような像をめぐるアーシプの儀礼を通して、アーシプの特性、儀礼における造形物の意義などを宗教学的に考察する。

アクル文書の行政的文脈について

村井 伸彰（本学会会員）

アクルという名前は食べるというアッカド語の動詞 *akālu* から派生していて、主に大麦、ビール、油、羊、などが取り扱われている。しかしながら、このアクルと呼ばれる記録がはたして、受領の記録なのか、それとも支出の記録なのかは長い間あいまいなままであった。というのも、記録がシンプル過ぎてどちらとも判断がつきにくいということがあった。アクルの記録がこれまでに約 250 点確認されていて、その内の 190 点ほどに印影が認められる。幸いなことに、マシュー（D. M. Matthews, *The Kassite Glyptic of Nippur*, 1992）がこれらの印影を整理してまとめて出版している。彼に従うと、ニヌルタ・ナーディン・アッヘーの印影のある文書が最大のグループ（125 点）で、リームートゥ（41 点）、ニヌルタ・キーン・ピーシュ（16 点）となる。私はそれぞれのグループの特徴（年代、地域、主要人物、品物、など）を整理し、比較検討した。またアクル以外の文書も援用してアクル文書に言及される人物の情報を集めたところ、これらの人物は役人で有力な家系のメンバーであり、またアクルの管理をしていたことが明らかになった。また、職人（ビール醸造者、粉屋、など）が品物（大麦、ビール、油、羊、など）をさまざまな目的（宴会、奉納、家畜の飼料、旅の食糧、など）の為に準備していたことも明らかになった。つまり、アクルは職人によってさまざまな目的の為に準備され、その記録を役人が押印していたことになる。

本発表では特にアクル文書の行政的文脈に焦点を当てたいと考えている。アクル文書だけではそれが行政のどの過程での記録なのかが分からない。そこでアクル以外の類似の文書を用いてアクル文書が作成された文脈を論じる。

ヒッタイト王国による東西の辺境支配について—アナトリア西部の支配を中心に—

山本 孟（日本学術振興会特別研究員 PD）

紀元前 2 千年紀にアナトリア中央に位置するハットゥシャを都として成立したヒッタイト王国は、紀元前 14 世紀以降、アナトリア中央に留まらず、アナトリア西部およびシリアへと勢力域を拡大した。ヒッタイト王は、多くの従属国に対して文書上で主従関係を誓わせることで現地の支配者に支配を行わせたことがわかっている。ただし、名目的には支配下にあったとしても、王国の西に位置するアナトリア西部と東のシリア北部の従属国では、ヒッタイトの支配に対するアプローチは異なっていたと考えられる。

王国の中核となる領域については、これまで「統治する」という意味のヒッタイト語動詞 *maniyahh*- の用例から考察してきた。この語は、国家の最高神がヒッタイト王を為政者に任じて国土を委ねるという文脈と、ヒッタイト王が神々から与えられた国土を分割して他者に支配を委ねるという文脈において用いられる。この語を用いて統治に言及される地域には、アナトリア中央だけでなく、ヒッタイト王族に統治を委任していたシリア北部のカルケミシュなども含まれる。したがって、最高神から王に委ねられた国土と見なされた本国の領域は、アナトリア中央からシリア北部の一部地域にまで広がっていたと考えられる。

一方、本国を越えた地域では、ヒッタイト王は現地の有力者に実質的な支配の継続を認めていた。本発表では、そのような地域の中でも特に、アナトリア西部の従属国に対する支配のあり方に着目する。政治・行政にかかわるヒッタイト文書から国境にかんする言及を収集し、西部の従属国の国境がどのように定められているかを地域ごとに整理し、その領域がいかに本国と区別されていたのかについて考察する。

王 vs. 市神—エマル文書における「主」とは誰か—

山田 雅道（中央大学・筑波大学）

エマル文書（前 13-12 世紀シリア）には、エマル市民が「彼の主」に対し罪を犯した結果、ニヌルタ神と市の長老会、すなわち市当局によって彼の財産（不動産）が没収されたことを記す文書が 8 点認められる。このうち 7 点では、没収された不動産がその後、市当局によって転売されている。本発表ではこの「主」（EN = *bēlu*）の同定問題を取り上げたい。

この語の用例を見ると、その候補としてはエマル王 (*Emar VI 17*) と市神ニヌルタ (*BLMJE 24*) の二者が考えられる。ここで注目すべきは、上記 7 点の不動産売買文書には王や王宮への言及が皆無であるにもかかわらず、全てに王家の印章が（ニヌルタ神の印章とともに）押印されている点である。残る 1 点の遺言書 *Emar VI 197* では、遺言者の息子の一人が自ら犯した罪ゆえに財産相続分を没収されているが、ここでも遺言自体の内容は王や王宮と無関係である。にもかかわらずこの文書に王家の印章が押印されている点は特筆される。これらの事実は以上の全 8 文書と（市当局のみならず）王宮の間の密接な関係を強く示唆するが、それは上記の「主」がエマル王であることによつてのみ十全に説明されよう。古代西アジアでは王に対し罪を犯した者の財産を王が没収するのが通例ながら、没収者が市当局である点にエマル王国の特徴を見て取ることができる。

この「主」＝「エマル王」という結論は、イルイブ・バアルなる有力市民が「彼の市と彼の主」に対してなした功績——略奪された王女 4 人と財宝を、自分の娘 4 人および金銀と引き換えにフリ国王から取り返したこと——に報いるため「王とエマル市」がその子孫に栄誉を授けた件 (*LN-104 = GsK-T 6*) に関しても同様に適用されよう。このことは、功績の鍵となる要素がエマル「王女」であった点からも支持される。と同時に、最初の「市」と「主」（＝王）という組み合わせが、次に「王」と「市」に変わっている点も興味深い。この語順の逆転が厳密に何を意味するのかは不明ながら、既に扱った「罪→財産没収」の場合と同様、少なくとも王(宮)と市(当局)間の密接な関係、ただし前者が後者を完全な支配下に置いていない状況を、この文書から読み取することは十分に可能であろうと思われる。

アッシリアの大規模強制移住政策を再考する

佐野 克司（筑波大学）

アッシリアの大規模強制移住政策にかんする最初の体系的な研究は、1979年にB.オデッドによって提出された。オデッドは王碑文を主体とする史料を網羅的に検証し、アッシリアが新アッシリア時代と称される約300年の間に被征服民を対象とした大規模強制移住を157回実行し、少なくとも1,210,928人がその犠牲となったことを明らかにした。157回の強制移住の内、すべての事例に捕囚民の人数が記されているわけではないため、オデッドは人数が記されている43例の合計数である約121万を43で割り、一回あたりの強制移住において連れられる人数を28,000人であるとし、その28,000人を157と掛け、最大で約440万人が強制移住の犠牲になった、と主張した。このオデッドが算出した総数は、多くの研究者に受け入れられているが、捕囚民の総数を導き出すこと自体に大きな問題がある。というのも、そのような単純な計算が、あたかもアッシリアが300年間にも渡って、常に画一的で同規模なオデッドの称する「大規模」強制移住を実行し続けたかのような印象を与えるからである。新アッシリア時代に強制移住を行った13人の王の内、なぜ5人の王の碑文には捕囚民の人数がまったく記されていないのか、またなぜ碑文に捕囚民の人数を記している王もすべての強制移住にかんしてその人数を記載していないのか、と問い、アッシリア王碑文において「王の強さ」は捕囚民や略奪品の数と密接に結びついていたため、強制移住によって連れ去った捕囚民の数が少ない場合には、「王の強さ」を損なう恐れがあったため、書記たちが意図的に碑文に数字を記さなかった可能性がある、と回答するならば、すべての強制移住を「大規模強制移住」と称することはできず、想定される捕民の総数は440万人には決して達しないことが理解される。オデッドが算出した大規模強制移住の合計回数は捕囚民の総数と同様、多くの研究者に受け入れられているが、実際にはもっと多くの強制移住が実行されていた可能性がある。アッシリアの強制移住政策を研究する上でもっとも困難な問題は王碑文において頻繁に使用される *šallassunu ašlula* 「私は彼らの *šallatu* を持ち去った」という表現とそのバリエーションにおける名詞 *šallatu* の解釈にある。名詞 *šallatu* は「戦利品」と「捕虜」の意味を有しており、この表現における *šallatu* は一般的に「戦利品」と訳される。オデッドは、ここで使用されている *šallatu* が「捕虜」を含むのかどうかを理解することは不可能であると主張した。しかしながら、二つの方法を用いた調査—同じ出来事に言及している複数の王碑文の比較と *šallassunu ašlula* 等の表現が碑銘として刻まれたレリーフの調査—を行った結果、不明確な表現における *šallatu* が必ず「捕虜」を含むことが判明した。これによって新たに80回の強制移住が明らかになった。

シャルマネセル3世の年代記における治世第28年の遠征記事の役割

青島 忠一郎（中央大学）

本発表ではシャルマネセル3世（即位前859-824年）の治世第33年に作成された2つの年代記に記される治世第28年の遠征に関する記事を考察する。

前9世紀半ばに即位し、アッシリアの支配圏の拡大に努めたシャルマネセル3世の王碑文は数多く残されている。なかでも王の遠征を年代順に記した年代記は、シャルマネセル3世の治世を研究する上で欠かせない史料となっている。すでに指摘されているように、シャルマネセル3世の治世中に年代記の様式は大きく変化する。この王の治世初期に作成された年代記は、前王アッシュル・ナツィルパル2世に倣い、王の遠征をリンム年で年代付け、困難な地の進軍や敵との戦闘などを詩的表現を用いて詳しく描くことで、王の軍事上の功績を強調した。これに対し、遅くとも治世後半には導入された新しい様式で記された年代記は、各遠征を王の治世年で数え、碑文を記すスペースの問題から、個々の遠征について王（あるいは王の命令を受けた臣下）の出陣と遠征した地の征服を簡潔に記す。

こうした傾向を持つシャルマネセル3世の年代記において、治世第28年の遠征に関する記事は異例な叙述となっている。治世第28年の遠征記事は、パティンにおいて住民が自分たちの主である属王ルバルナを殺害したという報告を受けた王が將軍ダヤン・アッシュルを派遣して鎮圧にあたらせたと伝える。この記事は遠征の理由として反乱を明記するだけでなく、反乱者の処刑などにも言及し、他の年に行なわれた遠征の記事よりも詳細に出来事を描く。これに加え、反乱報告を受けた王が遠征を組織したという文言は、アッシュル・ナツィルパル2世の王碑文の遠征記事に特徴的なものであり、書記が前王の王碑文から文言を借用してパティンの反乱鎮圧を描いたことを示す。

本発表では治世第28年の遠征に関する記事を考察し、この記事の異例な叙述の背景と役割について論じる。

『エサルハドン王位継承誓約文書』にみる条件節の用法を再考する

渡辺 和子（東洋英和女学院大学）

前 672 年にアッシリアで書かれ、その支配下に広められた『エサルハドン王位継承誓約文書』（ESOD）は、アッカド語で書かれているが、そのうち、ほぼ9割が新アッシリア語に分類される。また、多くの条件節（「もし…ならば」）が用いられている。

伝統的なアッカド語文法書では単に、条件節における動詞は直説法とされていた（von Soden, *Grundriss der akkadischen Grammatik*, *Analecta Orientalia* 33, 3., *ergänzte Auflage*, Roma 1995, §161a）が、すでに発表者は、条件節のなかの動詞が直説法である場合と接続法である場合の意味合いの違いについて論じた（渡辺和子『エサルハドン王位継承誓約文書』リトン、2017年）。

本発表では、条件節の動詞が直説法である場合でも、文脈に応じて異なる含意があり、異なる訳出が求められることを考察する。その「文脈」として第一に検討すべきは、その箇所が ESOD の 9 つの構成要素（「命令」「制定事項」「条件節」など）のうちのどれに当たるかである。その他にも、それぞれの箇所に反映され得る歴史的背景などを考慮する必要がある。

アッシェルバニパルの王宮浮彫に表現されたライオンに関する考察

渡辺 千香子（大阪学院大学）

Jamie Novotny（ミュンヘン大学）

新アッシリア時代の王アッシェルバニパル（前 668～631 年頃）が建立したニネヴェの北宮殿からは、王の狩猟を描いた石製浮彫が数多く出土している。中でも王のライオン狩りに関する浮彫は、複数の広間（Rooms C, S, S¹）と長い通路（Ascending Passages A & R）の壁面を装飾していたことから、この主題の重要性がうかがわれる。これらの浮彫に描かれたライオンのたてがみには微妙に異なるパターンが混在している。しかしこの違いが何を意味するかについて、これまで体系的な研究は行われていない。

北宮殿 C 室は、壁面全体に王のライオン狩りが展開する。狩猟に先立つ準備場面とアリーナ内で行われた狩猟が描かれた北東～南東壁面には、合計 18 頭のライオンが登場し、そのうち 14 頭が雄である。雄ライオンは首と肩の周りから下腹まで続いたたてがみに覆われて表現される一方、雌はたてがみを有さない。雄ライオンのたてがみは、毛の流れに沿って 5～6 本の筋が刻まれた毛の房がうろこ状に組み合わせられて表現される。一方、頬の周りのたてがみは、周囲と区別されて独立した「頬ヒゲ」として描かれる。この部分のたてがみは色がやや薄く明るい傾向にあるという。アリーナ内の 18 頭の頬ヒゲは、内側に向かって小さめの房が 2 列ずつ配列された合計 4 列並ぶタイプ（A）で描かれている。一方の南西壁面には雄ライオンが 10 頭確認でき、王が自ら殺害しているライオンと王の戦車周囲に描かれたライオンは A タイプである一方、向かい合う 2 台の戦車の間に位置する後足立ちのライオン、ならびに画面左側の 3 頭のライオンは、ストレートの斜線を引いて描かれた頬ヒゲ（B タイプ）を有している。A タイプは、王室庭園で飼われたライオン（E 室）や、王に尾をつかまれたライオン（S¹ 室）等に確認される。一方、B タイプは S 室と S¹ 室に多く登場し、中でも王が広大な草原で戦車上からライオンの群れと戦う場面を描いた浮彫では、B タイプのライオンが圧倒的多数を占める。この部分の浮彫は銘文を伴い（Novotny and Jeffers, RINAP 5/1 (2018) no. 54; Or. Dr. 5 no. 3 epigraph）、ライオンの表記にアッカド語 *nēšu* ではなく *labbu* が使われ、さらに「激怒したライオン、獰猛な山生まれの種 (*labbī nadrūti ilitti ḥuršāni ezzūti* “rag[ing] lions, a ferocious mountain breed”)」と説明される。ライオンの死体を運ぶ際、A タイプは家臣 4 人でライオンを肩に担ぐが、B タイプは一貫して 6 人が身体の前脇に抱えて運ぶ。ここから B タイプの方が A タイプよりも身体の前脇が常に大きかったことがわかる。この違いが何を意味するかについては、今後より詳しい美術・文献学的検証のほか、動物考古学・動物生態学等の各専門分野の見解を多角的に考察していく必要がある。

「エサルハドン王位継承誓約文書（ESOD）」の「申命記（Dt.）」への影響
—直接的文学的引用関係の痕跡を探る—

高橋 優子（酪農学園大学）

前9世紀から前8世紀（前710年頃まで）アッシリアの首都であったニムルド（カルフ）でエサルハドン王位継承誓約文書（Esarhaddon's Succession Oath Documents）が発見されたのが1955年であり、出版されたのは1958年であった。それまで類似の文書として知られていたのはヒッタイトの「条約」のみであり、申命記研究者はもっぱらヒッタイトの「条約」との並行関係を論じていた。しかし、ESODが9部発見された後には、申命記とESODの並行関係にも関心が集まるようになった。中でも、ESODと申命記28章の並行関係がもっとも注目されることとなった。それは、いわゆる「呪いのリスト」の内容が酷似しており、事柄の順序まで一致しているものがあるため、両文書間における直接的引用が明白と考えられるからである。

他に、ESODと申命記13章のパラレルにも関心が寄せられたが、これについては28章ほど直接的ではないことから、文学的依存関係は証明されるには至っていなかった。さらにESODと申命記6:4-5との並行関係への言及も一部に見られたが、これについてはさらに類似が限定的で、引用関係自体が曖昧な状態であった。そもそもESODと申命記に並行関係を見ることに対する批判も根強く存在してきた。例えば他の楔形文書資料にも申命記とのパラレルが見られること、あるいはニムルド（カルフ）以外ではESODの写しが発見されていないこと、そして本質的にESODと申命記は文書の性質が違うこと、あるいは聖書が「異教」をモデルにすることと思えないこと、そしてアッシリアが衰退してからアッシリアの文書を使うとは思えないことなどという理由で批判が行われてきた。

しかしアッシリア中心地から遠いテル・タイナト（古代名はクナリア、クヌルア、キナリアほか）でESODが2009年に発見され、2012年にテキストが出版されて以降、申命記（とくに13*・28*章）のESODへの依存関係が明白とみなされるうる状況が生まれている。この点については自明と見なす一部の研究者と、それに反対する研究者が激しく対立しており、とくに新アッシリアの文書が直接的文学的影響をユダ王国の文書に与えた可能性をめぐって、以前と同様の状況が依然として続いている。たとえエルサレム神殿でESODの書版が発見されたとしても、まだ研究者間の対立は解消されないであろう。ESODの影響を過小評価しようとする研究者たちは、Oral Traditionやレヴァント全体の文化など、特定不能の大きなカテゴリーにこの論点を吸収することに意を注いでいるからである。しかし発表者はinverted quotation（交差的引用）というレトリックに注目することによって、直接的文学的影響を示すことはなお可能だと考えている。語・文・段落レベルでの「転位」に着目するなら、証拠が少ない古代についての研究の曖昧さをいくらか解消し、より高い蓋然性に到達する助けになるという仮説を提案する。

エルサレムにおけるヘレニズム化—石切墓の形態から—

長尾 琢磨（慶應義塾大学）

アレクサンドロス大王の東征、そしてディアドコイ戦争の結果として、ユダヤ地方は前4世紀末にはプトレマイオス朝の統治下に置かれることになった。プトレマイオス朝の統治は比較的寛容なものであったが、セレウコス朝の統治へと変わることによってその状況は一変した。セレウコス朝は古代ユダヤ教へと干渉を強め、それに対する反感から前2世紀半ばにはユダヤ人独立王朝であるハスモン朝が成立することになる。このハスモン朝が成立するまでのヘレニズム時代において、ユダヤ人の物質文化がヘレニズム化したことは、既に考古学的研究から明らかである。建築装飾はギリシア建築様式になり、土器の型式もペルシア時代から変化した。その一方で、文献資料研究からはユダヤ人の中にヘレニズム化に対して抵抗する一派があったことが分かっており、古代ユダヤ教の律法に関する部分に関してはヘレニズム化に対する抵抗があったことが伺える。

このようにヘレニズム化は、受容と抵抗のせめぎ合いであったと考えられる。そして、その背景にはバビロニア捕囚を経て生じた律法の遵守という考えがある。しかし、土器や建築装飾などの考古学的研究からは、ユダヤ人の律法に迫ることはできず、文献資料研究は物質文化に直結しないという問題がある。この問題を解決し、宗教的に強固な信念を持ったユダヤ人のヘレニズム化に対する反応を考古学的側面から明らかにするために、本発表では石切墓(Rock-cut Tombs)を取り上げる。古代ユダヤ教の口伝律法を文書化したミシュナーには埋葬に関する規定が存在し、そこに記載されている墓は石切墓の一種であるロクリ墓であり、実際にヘレニズム時代からローマ時代にかけて主に利用されている墓である。ロクリ墓は、元々はフェニキアで利用されており、東征を契機として前3世紀頃にヘレニズム都市に拡散した。その中でエルサレムには前2世紀頃に伝わったことから、当初は外来の全く新しい墓であると考えられていた。しかし、近年、他地域のロクリ墓と異なる部分がある可能性が指摘され、ユダヤ地方の前時代の墓であるベンチ墓との関係性が論じられてきた。この状況を考えると、ロクリ墓は古代ユダヤ教の律法に関する物的証拠であり、同時にヘレニズム化の中でユダヤ地方に取り入れられた新しい要素でもある。ロクリ墓について考古学的側面から研究を行うことで、ヘレニズム化におけるせめぎ合いの一端を明らかにすることができると思われる。本発表では、ユダヤ地方の中でロクリ墓が最も早く取り入れられ、その数も最も多いエルサレムとヘレニズム都市の石切墓を比較することで、エルサレムにおけるヘレニズム化の様相を探る。

ザグロス地方中期旧石器時代石器群の変異

西秋 良宏（東京大学）

西アジアの中期旧石器時代はアフリカから進出した現生人類とヨーロッパから南下したネアンデルタール人とが共存、交流、交替を演じた時期にあたる。その実態解明には出土する人類化石の同定、年代付け、遺伝的関係など古人類学的手法による研究が重大な役割を果たすが、化石人骨の発見がきわめて限られている現状では、より普遍的に見つかっている石器資料の研究による文化史的視点からの説明に期待が集まる。

本発表では、西アジア東部、ザグロス地域における中期旧石器時代の石器群について述べる。ザグロス山脈はトルコ東部からイラク北東部、イラン南東部にまたがる。当地の中期旧石器は1960年代のJ.スキナーの比較研究以来、ザグロスムステリアンとして認知されており、西アジア西部のレヴァント地方ムステリアンとは異なる伝統に属するとされてきた。すなわち、ルヴァロワ技術をほとんど用いず、肥圧な剥片素材の削器を大量生産する石器群として定義された。しかしながら、以後、資料の再分析によって多様性が認められることも指摘されており、その定義が妥当かどうか再検討が必要となっている。

近年の新資料を含めて整理すると、少なくとも四つの石器群の存在が指摘できる。(1)スキナーが指摘したような剥片削器を主とする石器群（シャニダール、クンジなど）、(2)剥片削器を主とするがルヴァロワ技術を高頻度で用いている石器群（ビシトウン、ミラなど）、(3)尖頭器を多く含む長形ルヴァロワ石器群（ハザール・メルドなど）、(4)両面加工石器をともしう石器群（カレ・ボジなど）。このうち(1)と(2)にはネアンデルタール人化石が共伴している（シャニダール、ビシトウン）が、(3)(4)の担い手は不明である。

これらの石器群を三時期区分が確立しているレヴァント地方の編年と比較してみると、(3)はレヴァント地方の前期ムステリアンとおおまかな類似をみせること、(4)はレヴァント地方よりもむしろアラビア半島との類似をもつことがわかる。一方、問題は(1)と(2)である。(3)の位置づけが正しいとすると、これらの石器群は中・後期ムステリアンに相当するが、レヴァント地方では、この時代には現生人類とネアンデルタール人の双方がいたとされる。ザグロス地域ではネアンデルタール人化石の出土しかないが、どのような経緯が背景にあるのか、その研究の現状と問題点を整理する。

クルディスタン原新石器時代における押圧剥離石刃製作の開始について

前田 修（筑波大学）

肥沃な三日月地帯の東部、ザグロス山麓の原新石器時代から新石器時代には、押圧剥離技法による定型的な石刃の製作が発達したことが知られている（Nishiaki and Darabi 2018）。中央アジア方面から伝わったと考えられるこの技法は、この地域では紀元前 10 千年紀ごろの、ムレフアーティアン、ネムリキアン石器インダストリーに代表される原新石器時代文化期に出現したと考えられ、以降、時期を下るとともに、洗練された砲弾型の石核を用いた押圧剥離技法へと発展し（Matthews et al. 2018）、土器新石器時代までにはザグロス山麓全域に広く普及するようになる。しかしながら、押圧剥離技法がこの地域に導入された初期の様相については、資料が少なく未だ不明な点が多い。こうした状況の中、近年調査がおこなわれたイラク・クルディスタン自治区エルビル県の大ザブ川右岸に位置するサトゥ・カラ遺跡（Pappi 2016）では、紀元前 10 千年紀ごろに相当すると考えられる先史時代の堆積層から、原初的な押圧剥離技法による石刃製作に用いられたチャート製の細石刃石核および細石刃が出土しており、初期の押圧剥離石刃製作技術の存在が示唆されている（Maeda and Pappi in press）。本発表では、サトゥ・カラ遺跡出土石器資料の分析結果にもとづき、この地域における押圧剥離技法の出現と発展の過程をトレースすることを試みる。

参考文献

- Maeda, O. and C. Pappi (in press) Bladelet production by pressure-flaking at the Proto-Neolithic site of Satu Qala in Iraqi Kurdistan. Proceedings of the 8th International Conference on PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East. Nicosia, November 23rd-27th 2016.
- Matthews R., A. Richardson and O. Maeda (2018) Behind all those stones: activity and society in the Pre-Pottery Neolithic of the Eastern Fertile Crescent. In B. Horejs et al. (eds.), *Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East. Volume 2*: 377-390. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Nishiaki, Y. and H. Darabi (2018) The earliest Neolithic lithic industries of the Central Zagros: New evidence from East Chia Sabz, Western Iran. *Archaeological Research in Asia* (in press).
- Pappi, C. (2016) Satu Qala: an assessment of the stratigraphy of the site. In K. Kopanias and J. MacGinnis (eds.), *The Archaeology of the Kurdistan Region of Iraq and Adjacent Regions*: 297-307. Oxford: Archaeopress.

西アジア鉄器時代集落の構造的考察
—北メソポタミアおよびレヴァント地方における「都市」と「村落」クラス集落の比較から—

西山 伸一（中部大学）

西アジア鉄器時代のセトルメント・パターンは、各地で青銅器時代のそれとは大幅に変化したといわれる。つまり、青銅器時代のより階層的な構造から「村落」クラス集落がより自立し、「都市」クラス集落の中央集権的役割が弱まったという見解が出されている（S. Mazzoni など）。また、ここ 30 年ほどで西アジアにおける考古学踏査の範囲は広がり、鉄器時代集落の分布や特徴も徐々に解明されてきた（T. J. Wilkinson, J. Ur など）。しかし、これまで鉄器時代集落のセトルメント・パターンや集落構造の特徴、およびその変化については、南レヴァント地方の事例研究（Z. Herzog, P. Bienkowski, A. Faust など）を除きほとんど議論されてこなかった。

近年、メソポタミア北東部、現在のイラク・クルディスタン地域の考古学調査が進展し、この地域に特異な鉄器時代の「都市」と「村落」クラスの集落が存在することが確認できた。これらの集落構造をレヴァント地方の事例と比較することで、西アジア鉄器時代の集落構造における共通点、および相違点を考察する。

また鉄器時代「都市」クラス集落の「下の町」の構造についても、発表者のイラク・クルディスタン地域における成果をもとに、レヴァント地方の事例との比較を行う。特に着目するのは、円形の集落構造をもつ「都市」クラス集落である。これらは、ほとんどの場合、発掘されることは少ないものの、ある程度の規則性をもつことが予測される。

最後に、西アジアの鉄器時代は、小国家乱立状態から巨大な国家（新アッシリア帝国）が各地を統一支配するという劇的な政治的変化のあった時代である。その中で「都市」や「村落」クラスの集落がどのように対応していったのかを指摘する。

『古代スーダンの鉄製品に関する研究試論』
—スーダン国立博物館所蔵資料から—

関廣 尚世（公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）

Elgazafi Yousif Eshhag（National Corporation of Antiques and Museums）

近年のスーダンの鉄に関する調査研究では、メロエ遺跡やその周辺における生産址研究や復元作業が中心的に行われている。しかし、古代スーダンの物質文化にどのように鉄製品が組み込まれ、実用化されていたのかという視点も重要と考えられる。

スーダン最古の鉄製品は、ナイル川第3急湍域にあるトンボス遺跡から出土した鉄槍と考えられてきた。2005年に第9区の土坑墓が調査され、男性被葬者の右手から、大小あわせて5点の鉄槍が出土した。共伴遺物から、時期は紀元前8世紀末であることが判明した。また2011年には、同遺跡から紀元前10世紀の鉄轡片が出土し、古代スーダンにおける鉄製品の初現期が遡ることになった。

第57回大会の口頭発表で発表者は、「古代スーダンへの鉄製品および製鉄技術の導入時期について少なくとも3つの画期がある」とした。すなわち、「鉄製品」が搬入された第1の画期、「製鉄技術」が導入された第2の画期、そして、鉄が古代スーダン特有の神であるアプデマクと結びついた第3の画期である。また、第3の画期を迎えたのち、紀元前後には鉄器の実用化が行われるとした。

新しい調査によって第1の画期は今後も変動する可能性が強いが、本発表では国内外のこうした現状を踏まえ、スーダン国立博物館所蔵の鉄製品も例にとりながら、鉄製品の導入期からイスラム期に至るまで、どのような器種変遷や組成が展開していったのかという点を掘り下げたい。

広域測量による南インド巨石文化遺跡の検討

上杉 彰紀（関西大学）

南インド巨石文化とは、前1千年紀を中心に南インド（ここではインド半島部をいう）において広域に展開した鉄器時代文化である。その最大の特徴は、石材を用いて築かれた墳墓であり、中には大型石材を用いて構築された例が多く含まれることから、「巨石文化（Megalithic culture）」の名称で知られる。南インドにはこの文化に属する墳墓が各地に展開しているが、出土遺物の検討から、この広域に分布する墳墓群が地域間のつながりの中で築かれたものであり、一つの文化を形成していたことがわかる。

19世紀前半以来、南インド各地で特徴的な墳墓群が発見・報告され、多くの研究者の関心をひいてきたが、中には記録が十分になされずに破壊されてしまったものも多く、この文化の空間的広がりを検討する上での障害となっている。それでもなお、各地に墳墓群が残っており、それらの体系的記録化が今日的な研究課題となっている。

現存する墳墓群の中には、数十～数百の墳墓が群集して一つの遺跡をなしている例が確認されている。すなわち、巨石文化の墳墓は単発的に散在するのではなく、特定の場所が当時の社会集団によって選択され、一定期間にわたって墓地として利用されたことを物語っている。大型墳墓群の近郊に集落遺跡が確認されない例も多く、墳墓群の選地が集落との近接的な空間関係に拠っていたわけではないことを示している。このことは巨石文化社会の空間的展開や土地利用、社会＝文化的景観を考える上での重要な手がかりである。

南インドには沖積平野、丘陵、山地、海岸など、多様な地形が含まれており、地域ごとに異なる地形環境が展開している。墳墓群はそうした多様な地形環境に立地しており、墳墓群の選地の原理も異なっている可能性がある。多様な地形環境における墳墓群の分布は、墳墓群を築いた人々の生業や生活様式、資源利用、地域間交流などの諸側面における社会＝文化的戦略の多様性をも示していると考えられる。また、各墳墓群遺跡における墳墓の分布のあり方や、地形との関係において形成される景観も巨石文化集団の墳墓群に対する意識を投影していると推測される。

このようにマクロ・ミクロ諸レベルでの墳墓・墳墓群の分布のあり方とその社会＝文化的意味を検討・評価するためには広域分布調査が不可欠である。本発表では、マハーラーシュトラ州東部、テーランガーナー州、アーンドラ・プラデーシュ州、ケーララ州における巨石文化墳墓遺跡の分布のあり方について、現地における分布調査の成果をもとに検討・考察する。

古代エジプト、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の単純埋葬の埋葬方法に関する一考察

米山 由夏（鶴見大学）

古代エジプトでは、岩窟墓や神殿型平地墓などの壁画や上部構造を伴う墓の他に、土坑墓や単純埋葬と呼ばれるような、比較的簡素な墓も存在する。これらの簡素な墓は、Simple BurialやSurface Graveなどと呼ばれ、本発表では前者を便宜的に「単純埋葬」と日本語訳し使用する。単純埋葬は、一般的に身分の低い人物の墓として考えられており、副葬品の出土量も少ない。埋葬の出土件数は膨大ではあるものの、王墓や高官などの墓に比べて情報量が少ないことから、これまで進んで研究が行われてこなかったと考えられる。

単純埋葬は身分の低い人物の埋葬と一概に言われてきたが、詳しく見てみると砂の上に直接埋葬されているタイプ、土坑に埋葬されているタイプ、石灰岩や日乾レンガの周壁に埋葬されているタイプ、ミイラ処理が施されているタイプ、ミイラ処理の施されていないタイプ、カルトナージュが付属するタイプや付属しないタイプなど、さまざまなタイプの埋葬が見られる。このように多種多様な埋葬方法が見られることから、単純埋葬の中でも、貧富の差を明らかにすることができるのではないかと考えた。

埋葬の貧富の差を明らかにする際に有効な方法として挙げられるのが、副葬品や埋葬の形態を分析する方法である。副葬品は被葬者の生前の社会的な地位や、財力を表していると考えられており、中王国時代や新王国時代などの埋葬の研究でも用いられてきた。また、副葬品の他にも、ミイラ処理の有無や墓の形態（土坑、レンガ周壁など）が貧富の差を計る指標ともなる。

こうした点を踏まえ、本発表では、サッカラ地域（階段ピラミッド西側、アケトヘテプのマスタバ墓、アヌビエイオン、プタハシェプセスのマスタバ墓など）における当該期の未盗掘墓のみを対象に、副葬品や埋葬形態などの情報も含めて、埋葬方法を複合的に検討し、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の単純埋葬の貧富の差を見ることで、当時の埋葬習慣の一端を明らかにしてみたい。

参考文献

- Giddy, L. L. 1992: *The Anubieion at Saqqara II: the Cemeteries*, London.
- Lndvatter, T. P. 2013: *Identity, Burial Practice, and Social Change in Ptolemaic Egypt*, unpublished Ph.D. dissertation, University of Michigan.
- Myśliwiec K. (ed.) 2008: *Saqqara III: The Upper Necropolis*, Warszawa.
- Strouhal, E. and L. Bareš 1993: *Secondary Cemetery in the Mastaba of Ptahshepses at Abusir*, Prague.

京都大学総合博物館エジプト考古資料 コプト織物について

横山 操（京都大学）

京都大学総合博物館エジプト考古資料群は、京都帝国大学初代考古学教室教授であった濱田耕作博士が、イギリスのロンドン大学教授のフリンダース・ペトリ博士のもとに留学したことを契機として京都大学に移管・寄贈されたものである¹⁾。2011年秋、総合博物館開館10周年特別展“埃及考古”の展示企画²⁾に際し、そのコレクションの一部であるコプト織物について、考古学と自然科学、美術修復家による共同研究を行い、年代や素材、製作技法について考察を加えてきた^{3), 4)}。これらの展示前調査に端を発して調査を継続し、国際シンポジウム”From Petrie to Hamada Egyptian Antiquities of Kyoto University”を経て⁵⁾、エジプト考古資料繊維製品のうち、ミイラ布断片および草履を対象とする放射性炭素年代測定を行った⁶⁾。これらの調査により、総合博物館所蔵エジプト考古繊維遺物は、製作年代が紀元前2世紀頃から13世紀までの幅広い時期に渡り、フリンダース・ペトリ博士と濱田耕作博士によって教育的配慮をもって収集・選定された、地域や年代、製作技法について豊かなバリエーションが随所に示される資料群であることが示された。本報告では、国内の他のコプト織物コレクションとの比較を通じて、京都大学総合博物館コプト織物資料群の特徴について考察を加えたいと考えている。

1. 京都大学総合博物館考古学資料目録：エジプト出土資料 京都大学大学院文学研究科考古学専修, 京都大学総合博物館編, 京都大学総合博物館, 2016.2
2. 埃及考古 ペトリと濱田が京大エジプト資料に託した夢, 京都大学総合博物館開館10周年記念企画展図録, 京都大学文学研究科考古学研究室 京都大学総合博物館 編, 2011.10
3. 横山 操, 中村力也, 成瀬正和, 村上由美子, 東村純子, 遠藤利恵, 泉拓良, 京都大学総合博物館所蔵コプト織物の調査：分光法による染料分析, 文化財と自然科学, 第68号, p 1-20, 2015
4. 横山 操, 坂本 稔, 遠藤利恵, 東村純子, 村上由美子, 泉拓良, 京都大学総合博物館エジプト考古資料コプト織物について, ヘレニズム～イスラーム考古学研究, ヘレニズム～イスラーム考古学研究会, 2017.12
5. Misao YOKOYAMA, The Coptic textiles stored in the Egypt Collection of Kyoto University Museum: Spectroscopic Analysis of Dyes, Radio Carbon Dating and $\delta^{13}\text{C}$ analysis, proceedings of SPIRITS Symposium From Petrie to Hamada: Egyptian Antiques of Kyoto University, 2016.12
6. Misao YOKOYAMA et.al, C14 dating and Spectroscopic analysis for dyes on the Coptic textiles, Radio Carbon (投稿中)

メトロポリタン美術館名誉館員・梶谷宣子氏に頂いたご教示に深い謝意を表します。

イシス信仰の終焉—ヘサ島の再評価を中心に—

坂本 翼（アジア太平洋無形文化遺産研究センター）

かつて、エジプトの最南端の第一急端地域に、ヘサ（Hesa）と呼ばれる島が浮かんでいた。二十世紀初頭に初めて考古学的調査の対象となったこの島は、当地域、特にフィラエ島でイシスを信仰していた神官団の埋葬地であり、考古学的にはプトレマイオス朝時代とキリスト教時代の遺構・遺物が見つかっている。ここでの神官団とは言うまでもなくアバトン（ビゲー島にあるオシリスの埋葬地）での儀礼を司っていた知的階級であり、該期の碑文史料によれば、フィラエ島の神官団は、十日毎にイシスの神像を神殿から担ぎ出し、ハドリアヌス門から河岸に降り、神像を小舟に乗せ、アバトンを訪れていたことがわかっている。「アバトンの神託」に語り継がれるこの一連の儀礼は、今日、第一急端地域の歴史を理解するうえで大変重要な要素となっている。

ところが、この儀礼がどのようにして衰退の一途を辿ったのかは必ずしも明らかではない。たしかに、「アバトンの神託」の製作年代（後二世紀）に鑑みれば、本儀礼はローマ帝政期にも継続して行われていたようである。また、フィラエ島に散見されるグラフィートを参照する限り、少なくともディオクレティアヌス紀元90年（後373年）まで実践されていたようである。ただ、上述した神官団に関してこれまで積み重ねられてきた議論の多くは、埋葬地が突き止められているプトレマイオス朝時代を取り上げたものであるか、あるいは、ローマ帝政期であっても、神官団が残したグラフィートの内容を断片的に解釈したものであり、更なる実態に真正面から踏み込もうとする研究は殆ど無かったように思われる。以上を踏まえる本発表では、ヘサ島の再検討を通じてこの実態に迫るとともに、本作業を通じて、該期の第一急端地域の歴史的変化を考察する。特に、古代エジプトの聖刻文字がまさにその姿を消す後四世紀中葉を焦点とし、キリスト教の到来前夜、フィラエ島の神官団が直面していたであろう困難に一考を加えてみたい。

Spatializing the Topography of Islamic Alexandria-Historic Maps via Remote Sensing and GIS

Mohamed Soliman (Ministry of Antiquities, Egypt)

A narrow strip of land between the Mediterranean Sea to the north and Lake Mareotis to the south was an excellent site for a city. In 332 BC one of the best architects of that time was asked to build Alexander's new city: a Greek named Deinocrates of Rhodes. The streets lay in a crisscross pattern planned into five quarters named after the first five letters of the Greek alphabet. The first two Ptolemaic kings erected many splendid buildings in Alexandria. The most famous of these was a magnificent lighthouse built on the Island of Pharos that was one of the Seven Wonders of the Ancient World. The Island of Pharos was joined to the mainland by overpass, a thick wall built in the sea called the Heptastadium encompassed with the Great Harbor to east and the Eunostos Harbor or "Harbor of Safe Return" to west. A 17km long canal was dug from the nearest branch of the River Nile to Alexandria conducts fresh water to a complicated underground water network.

Alexandria shrank after the Arab conquest in 641 CE by Amr ibn al-Aas due to several aspects, mainly establishing el-Fustat south to Cairo as a capital of Islamic Egypt, migration of many of the Romans and Jews, and demolishing the fortifications by Amr ibn al-Aas to prevent potential attacks of the Byzantine Empire. Furthermore, the shoreline has been shocked by violent earthquakes subsided the northern strip of the city. Alexandria extends once again steadily throughout successive Islamic eras, but most of the recent historic topographic features have been changed during the 19th century due to the European modernization trend trespassed the city.

Alexandria was surveyed by foreigner travelers, officers, and spies for several purposes produced historic maps; some were not precise enough due to technical reasons or for rushing. Chosen historic maps extracted from; "Atlas Historique de la ville des ports d' Alexandrie" collected by M. Gaston Jondet in 1922 CE, includes 54 cards mapping the topographic evolution of the city since Ugonem Comminelli's maritime map in 1472 CE to M. G. Jondet's map surveyed in 1920 CE. Khedive Ismail (1863-1897 CE) commissioned Mahmoud Pasha el-Falaki (the Astronomer) in 1866 CE to survey Alexandria for civil purposes that produced one of the most accurate historic maps. El-Falaki map shows some deep ancient natural and human landmarks still exist so far; lead to trace the topographic changes. However, Alexandria is a perfect multilayered city; so that exploration has priority, but archaeological layers have a negative impact causing widespread terrestrial subsidence. In order that, spatializing the historic topography of Alexandria via remote sensing and GIS build informatics database supports the national sustainable development strategy of 2030.

十字軍期南レヴァント地域における農業集落の性格
—ベイティン村発掘調査の成果に基づいて—

杉本 智俊（慶應義塾大学）

本発表は、十字軍期南レヴァント地域における農業集落の性格をパレスチナ自治区ベイティン村での発掘調査成果に基づいて解明することを目的としている。発表者らは2012年以来同村ブルジュ・ベイティン遺跡およびワディ・タワヒー地区の発掘調査を行い、周壁で囲まれた集落の中核、管理者の居館であった塔や小教会堂、さまざまな農産物加工用施設、大型貯水池、水車小屋、アクアダクトなどを確認した。これらを総合的に理解する時、当時の農業集落の典型的構成要素と性格を理解することができる。

南レヴァント地域には同時期の農業集落遺跡が多数存在しているが、これまで十分に研究されてこなかった。城砦など軍事遺跡に注目されることが多かったからである。しかし、本調査の結果、それらの農業集落が大規模かつ計画的に開拓されたものであることがあきらかとなった。それらは当時の有力者、教会、騎士団等の所領として開拓されたことが知られており、経営的農場として経済的基盤を確立し、十字軍国家が安定した面的支配を確立するために貢献したと考えられる。

エジプト第1王朝のサッカラ墓地における付属墓について

中野 智章（中部大学）

古代エジプト王朝文明のはじまりにあたる第1王朝（前3050–2900年頃）においては、首都メンフィスに面するサッカラ墓地に20数基の大型墓が築かれた。規模が25mx55mに及ぶ例もあるこの大型墓の被葬者像をめぐる、長らく王か高官かという論争が半世紀にわたって繰り広げられてきたが、近年では同じく大型墓が築かれたアビドス墓地における調査の進展などを経て、サッカラ墓地には高官層が埋葬されたとの説が広く支持されている。発表者はそうした見かたを一步進め、墓地は実際には南北2つの墓域に分かれ、南には王族、北には高官層が埋葬されたと考えているが、それには大型墓に伴う付属墓の解釈が一つの大きな鍵を握ると考える。本発表ではその付属墓につき、構造や副葬品、それに伴う葬祭儀礼の観点等から論じてみたい。

主要参考文献

- Emery, W. B. 1938. Excavations at Saqqara: The Tomb of Hemaka. Government Press, Cairo.
1939. Excavations at Saqqara: The Tomb of Aha. Government Press, Cairo.
1949. Great Tombs of the First Dynasty, I. Government Press, Cairo.
1954. Great Tombs of the First Dynasty, II. Egypt Exploration Society, London.
1958. Great Tombs of the First Dynasty, III. Egypt Exploration Society, London.
Macramallah, R. 1940. Un Cimetière Archaïque de la Classe Moyenne du Peuple à Saqqarah. Imprimerie Nationale, Cairo.
Martin, G. 2008. “The Stela and Grave of Merka in Saqqara North.” In: Zeichen aus dem Sand (eds. by E.-M. Engel, V. Müller, and U. Hartung). MENES 5. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
O’Connor, D. 2013. “Sabef and Merika: an Early Dynastic conundrum.” In: Decorum and Experience. (eds. by E. Frood and A. McDonald). Griffith Institute, Oxford.

クフ王第2の船の木材搬入方法について

柏木 裕之（東日本国際大学）

発表者は、本学会第56回大会（上智大学）において、「古代エジプト、クフ王第2の船 船坑の掘削手順について」と題した研究発表を行い、船材（木材）を納めた豎坑（船坑）の掘削とそれを覆う蓋石の設置は同時に進められた可能性を提示した。その場合木材は、蓋石が未設置の場所から挿入されたことになる。第56回大会では仮説の提示に留め、最終的な結論は木材の規模や埋納状況を踏まえた上で述べることにした。その後木材の取り上げが進み、船坑内の様相が明らかになってきたため、提示した仮説の検証を試みたい。

船坑は東西に長く、これを覆う39枚の蓋石は西から順に据えられたことが分かっている。このうち、東側の8枚と西側の31枚では蓋石と岩盤の隙間の詰め方に違いが認められ、設置作業にいくらかの時間差があったことを窺わせていた。そのため先の仮説に照らせば、東側8枚分の厚みに相当する東西約5.3m、南北約2.6m（船坑幅）の区画から木材が搬入された可能性を挙げることができる。

東側の一群には厚みの薄い石材が多用されていた。仮説に従えば東側8枚の設置は、既に木材が納められているため、制約の多い環境下での作業を強いられたと想像される。そのため石材を薄くすることで重量を減らし、作業を容易にしたと推察される。

納められた木材のうち最も長い材は約22mと見積もられた。蓋石列の東端には船坑に向かって下る幅約1mの傾斜路が掘られており、これを利用すると最大規模の木材も滑り込ませられることが図上で確認された。

木材は、下側に船体を作る大型部材を敷き並べ、その上に甲板（床板）や甲板室など船体上部のパネル部材を重ねていた。当初の船の姿を意識して納めたと考えられる。甲板室は船尾寄りに位置し、船坑内では東側にあたるが、パネル部材の多くは中央から西側に置かれていた。東端に搬入口があったため奥の西側から順に詰めたものと説明できる。

以上を踏まえると、第56回大会で提示した仮説は一定の蓋然性を持つといえよう。すなわち船坑の掘削と蓋石の設置は並行して進められ、作業は効率的に進んだと推察される。蓋石の設置作業は東側8枚分を残して一旦中断し、このスペースから船の部材が斜めに挿入された。そして重量を軽減した蓋石が慎重に据えられたと復元される。

作業を一つずつ順に終わらせるのではなく、複数の異なる作業を同時に進めるためには、多くの労働者を差配、管理する能力が必要である。こうした能力を備えていたことが、ピラミッド時代の膨大かつ活発な建設を可能にした要因の一つと考えられ、クフ王第2の船で想定された一連の工程はその様態を具体的に示す資料として有用である。

番付分析を用いたクフ王第2の船甲板梁の配置に関する検討

山田 綾乃（早稲田大学）

本発表は、クフ王第2の船の構造解明研究の一環であり、2016・17年の本学会大会にて発表した甲板室の構造および甲板の配置と構成に次いで、それらを支える甲板梁の配置に関して部材に記された番付を頼りに検討するものである。

甲板梁の総本数は、甲板梁に先立って取り上げられた左右一対の舷牆と甲板桁に施された梁を収めるための矩形の欠き込みの数から、50本となることが確認された（詳細は本大会ポスター発表-2にて報告）。

現時点で取り上げられた20本の梁には、断面形状、全長、そして側面に刻まれた番付という属性がある。50本の梁の配置（配列）を確定するために、まず断面形状の違いに注目すると、一本だけ例外的に作られた幅広の梁を除いて、長方形と凸型に分類された。凸型の断面を持つ梁は、甲板パネルの境目に設置され、甲板パネルの端を梁の両肩に載せ支える設計と推察される。したがって、凸型断面の梁は、甲板パネルの境目に位置することが判別できる。さらに甲板梁の全長の違いを甲板の幅に即して並べることで、概ねの配置が想定された。ただし、両属性を組み合わせても、船首・船尾でほぼ対称の構造を持っているクフ王第2の船では、ほぼ同じ長さの梁が複数あるため、配置の特定は難しい。

そこで一部の甲板梁の側面に刻まれた文字と数字の分析によって、決定打の不足を補うことを試みた。甲板室側壁・天井（山田 2017; Yamada *et al.* in press）においても同様の文字資料が確認されているように、部材に記された文字と数字の組み合わせは、それぞれの部材配置を示す「番付」であると考えられる。20本の甲板梁のうち8本に記されていた文字は、ファイル・マーク（*phyle marks*）と呼ばれる4種類の文字のうち3種類の文字と、凸型の梁を起点とした場合に当該甲板梁が何番目に位置するかを示した数字で構成されていた。これにより、一部の不確定だった配置が特定され、甲板梁全体が4種類のファイル・マークで4区画に区分されていることが推察された。さらに興味深いことに、tA-wrとimy-nDsの文字に付随する数字は、船尾側の凸型の梁を起点に振られていることも明らかとなった。tA-wrとimy-nDsでのみこの法則が用いられていることは、甲板室側壁左舷の事案と併せて、「左舷」という共通のキーワードでその背景を考察することができるだろう。

山田綾乃 2017「クフ王第二の船甲板室側壁と部材に記された文字」『史観』第177冊、pp.92-108。

Yamada, A. *et al.* in press “Reassembling the cabin of Khufu’s second boat in 2013-2016: A preliminary analysis of the wooden pieces and carpenters’ marks,” *Proceeding of 7th conference of Old Kingdom Art and Archaeology*.

エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代における葬制の特質とその背景

矢澤 健（東日本国際大学）

吉村 作治（東日本国際大学）

日本学術振興会科学研究費補助金による助成を受けた「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」（基盤研究(A)、研究代表者：吉村作治）の主要テーマとして、前2千年紀における葬制の変化に関する研究を発表者は継続してきた。この時期の葬制に見られる重要な変化の1つは中王国時代にあると考えられ、研究計画の最終年度に当たって、主要な研究対象であったダハシュール北遺跡から見えてきた中王国時代の葬制の特質とその背景について発表する。

遺跡の全体像を把握するため広い範囲に渡って部分的な調査を実施した結果、ダハシュール北遺跡は中王国時代後期の広大な墓地であったことが分かってきた。墓はシャフト墓と呼ばれる形式で、遺構の規模によって Large、Middle、Small に分類されており、墓のサイズと社会階層の高低には相関があると考えられる。Large、Middle サイズからは「宮廷タイプ」と呼ばれる高位の人物に特徴的な副葬品が発見されており、近隣のピラミッド墓地に葬られた王族・高官までには達しないが、比較的高位の人物が埋葬されていたと推測される。

「宮廷タイプ」では、被葬者は冥界で王として再生するオシリスに擬えられ、オシリスの再生・復活の儀礼に関連した副葬品が納められる。一方、本遺跡の Middle サイズからは「宮廷タイプ」の副葬品とともに、ファイアンス製の小像が発見された。この遺物は「宮廷タイプ」とは基本的に共伴しないとこれまで考えられていた。しかし、ファイアンス製の小像群は、他遺跡でしばしば共伴する牙製の「魔除けの杖（Magic Wand）」やクラッパーとともに、人の「生誕」や「再生」における呪術的保護の役割を担っていたと近年考えられており、オシリスの再生の思想に関連していた可能性がある。また Small サイズでも、人型木棺に見られる王の衣装の図像や、人型木棺やミイラマスクの顔が黒色に塗られていることなど、冥界の王であるオシリスを明らかに意識した装飾が施されている。

ダハシュール北遺跡の資料から強調されるのは、Large から Small サイズに到るまで、誰もが冥界においてオシリスになるという死生観が一貫して認められることである。支配層だけが実現できる埋葬の形態があり、それが「宮廷タイプ」になるわけだが、社会・経済的制約からそれが不可能な階層の人々は、共有された死生観に基づきそれぞれが実現可能なレベル・方法での埋葬を行っていたと考えられる。

こうした死生観が、社会の最上層だけでなく比較的広い範囲で共有されていた現象の背景には、中王国時代後期におけるオシリス神祭祀の隆盛が関係している可能性がある。

エジプト新王国時代、黒色木棺の編年に関する一考察

石崎 野々花（早稲田大学）

古代エジプト新王国時代（紀元前 16～11 世紀）の埋葬では被葬者を納めるために人型の木棺が用いられていた。それらの木棺は基調となる色によって、白色木棺・黒色木棺・黄色木棺に大別され、順に変遷することが知られている。なかでも黒色木棺は、第 18 王朝ハトシェプストの治世から第 19 王朝、メンフィス地域では第 20 王朝まで使用されていた（Taylor, 1989, 34; 吉村他, 2010, 42-43）。

黒色木棺の体系的な編年研究は L.サルティーニが進展させ、描かれている図像表現から 3 フェイズに分類した（Sartini, 2015）。そこでは、手や襟飾り、胸部に描かれるヌウト女神の表現に見られる時期差を明らかにしている。しかし彼女の分類には、これらの表現が残存しない資料には適用できない点や、図像表現の分析が不十分な点に課題が残っている。そこで基礎的な研究として、黒色木棺の変遷を見直し、年代決定の目安となる要素を再検討したい。

先行する編年研究は図像や手の表現に基準を置き、木棺の形状や組立方法には言及してこなかった。しかし、それらの要素にも時期差は反映されており、木棺の変遷を追う手掛かりになりうる。既に明らかになっていることとして、木棺全体の形状は、白色木棺から黒色木棺、黄色木棺にかけて変化している（Taylor, 1989, 34-35）。この点を踏まえると、黒色木棺のなかでも時期によって形状が異なる可能性がある。さらに木棺を構成する部材の形状や組立方法も、木棺全体の形状とともに変化すると想定される。実際に、白色木棺と黄色木棺の間では製作方法が部分的に異なっている。目的や製作時の状況に応じて、用いられる木棺材の形状や組合せ方法は変動していると考えられる。

本発表では、図像表現の再分類に加えて木棺構造の観点から黒色木棺の変遷を明らかにする。ここでは、各図像の意匠や足部・肩部・肘部の表現および各部位にあたる木棺材の形状と組立方法に顕著な時期差が表れていることを示す。

引用文献

- Sartini, L. (2015). The black coffins with yellow decoration: a typological and chronological study. *Egitto e vicino oriente*, 38(38), 49-66.
- Taylor, J. H. (1989). *Egyptian coffins*. Buckinghamshire: Shire Publications.
- 吉村作治, 矢澤 健, 近藤二郎, 馬場匡浩, 西本真一, 柏木裕之, 秋山淑子(2012). 「エジプト ダハシュール 北遺跡発掘調査報告—第 16 次・第 17 次発掘調査—」『エジプト学研究』, 18, 21-67.

ヘリオポリス出土のトゥトアंकアメン王銘入りレリーフ・ブロックについて

河合 望（金沢大学）

トゥトアंकアメン王は、アクエンアテン王によるアマルナ宗教改革の失敗後にアテン神を唯一の国家神とする信仰から、再びアメン神を中心とした伝統的宗教への復興を推進したとされる。信仰復興については、テーベのカルナク神殿出土の所謂『信仰復興碑』（カイロ・エジプト博物館：CG 34183）に記述があるが、エジプト全土の諸神殿における具体的な建築・修復活動については明らかになっていない。本発表では、トゥトアंकアメン王の信仰復興の具体的な証拠の事例として、太陽神ラーの聖地であるヘリオポリス出土の同王の銘のある 4 点のレリーフ・ブロックについて取り上げる。これらについては、ヘリオポリスのアラブ・アル＝タウィールで発見されたラメセス 2 世が造営した聖牛ムネヴィスの墓で建材として再利用された状態で出土し、1919 年にダレシーが簡易な報告を発表しているが、その所在が不明となっていた。発表者はエジプト博物館の地下収蔵庫にて再発見に成功し、調査を実施した。

第 1 のブロック (TR25/07/18/02) は、2 つの装飾面をもち、片面には「ヘリオポリスにいるアメン神、天空の支配者」の神像が描かれ、もう片面には「テーベのコンス神、ネフェルヘテプ」の神像が描かれている。それぞれの面にはトゥトアंकアメン王の「黄金のホルス名」が刻されている。このブロックに表されたアメン神とコンス神はテーベの神であり、トゥトアंकアメン王が、太陽神ラーの聖地であるヘリオポリスにアマルナ時代に否定されたアメン神とコンス神の祭祀を復活させたことを示唆する。第 2 のブロック (TR25/07/18/04) には、下エジプト第 2 ノモスのサインを頭に載せた豊穡の神が供物を運ぶ姿が描かれ、供物の上にはツタンカーメン王の即位名を改竄したホルエムヘブ王の即位名が認められる。第 3 のブロック (TR01/08/18/01) には、現在のカイロのバビロンの豊穡の神がトゥトアंकアメン王を迎える内容の碑文が彫られている。第 4 のブロック (TR01/08/18/03) にはトゥトアंकアメン王の「ホルス名」が記されている。

これらのレリーフ・ブロックの碑文と図像の検討から、これらはトゥトアंकアメン王が、アメン神信仰復興の一環として、太陽神ラーの聖地であるヘリオポリスに造営したアメン神に関連する建造物の一部であることが推察された。しかし、この建造物は他の建造物や記念物と同様に、トゥトアंकアメン王の名前が抹消されホルエムヘブ王の名前に書き換えられ、ホルエムヘブ王の記念物となった。そして、最終的にはラメセス 2 世の時代に破壊され、建材として再利用された。

アマルナ時代の音楽に関する一考察
—TUT's Trumpets の分析・考察を通して—

野中 亜紀（中部大学）

古代エジプト新王国時代第18王朝末のツタンカーメン王墓（KV62号墓）からは、3種類の楽器（トランペット、シストルム、クラッパ）がそれぞれ2点ずつ出土している。中でも、トランペットはTUT's Trumpetsと呼ばれ、出土遺物の中で唯一演奏が可能な楽器であるとともに、西洋音楽で使用するトランペットの原型と位置づけられてきた。

古代エジプトのトランペットについての先行研究は多くなく、管見に及ぶ限り、音楽学とエジプト学双方の観点から論じられた研究はない。ツタンカーメン王墓出土のトランペットの測定、及び分析・考察はハンス・ヒックマン Hans Hickmann（1908-1968）とリーサ・マニケ Lise Manniche(1943-)が行った。ヒックマンはTUT's Trumpetsを、オシロスコープを用いて測定し、演奏されたであろう音を想定した。加えて、当時までに発見されていたトランペットが描かれたレリーフを列挙し、古代エジプトのトランペットという楽器が有していた役割を論じたⁱ。マニケはツタンカーメン王墓出土の楽器のクラッパやシストルム、トランペットを分析し、トランペットの持つ役割について論じたⁱⁱ。録音実験としては、1939年にイギリスBBC放送にて、「チェリー・ピッカーズ」のバンドマンであるジェームズ・タパーンが吹いたものが代表的な実験として挙げられるⁱⁱⁱ。その他、古代エジプトに関する概説書の中で存在が取り上げられることは多いものの、TUT's Trumpetsのみを対象とした研究は少ないのが現状である。

先行研究では、2本のトランペットは対をなすものと解釈されたが、本発表では出土状況や図像、碑文の分析等から、それぞれ別の意味を担っていた可能性について論じてみたい。また、このアマルナ時代のトランペットはアンサンブルにおける1つの楽器、もしくは歌の伴奏楽器であるとも説明されてきたが、実際に出た音の想定などから、軍隊における信号楽器の役割を担っていた可能性についても考察を拡げてみたい。

ⁱ Hickmann, Hans. 1946. La Trompette dans L'Égypte ancienne. Cairo: L'Institut français d'archéologie orientale.

ⁱⁱ Manniche, Lise. 1976. Musical Instruments from the Tomb of Tutankhamun. Oxford: Griffith Institute.

ⁱⁱⁱ King Tutankhamun's Trumpets played after 3000+ Year

(<https://www.youtube.com/watch?v=Qt9AyV3hnlc> より) 2018.8.21 にアクセス確認済み。

古代エジプト、青色彩文土器の生産地の変遷について

高橋 寿光（東日本国際大学）

古代エジプト、新王国時代第18王朝中期から第20王朝初期にかけて、動植物の文様で緻密に装飾された、青色を基調とする「青色彩文土器」が見られる。輸入コバルトを原材料とする青色を使用していることなどから、限られた工房で製作された特別な彩文土器と考えられている。

早稲田大学・東日本国際大学古代エジプト調査隊が1991年より調査を行っているアブ・シール南丘陵遺跡では、第18王朝中期のアメンヘテプ2世から第19王朝中期のラメセス2世までに年代づけられる青色彩文土器が出土している。これまでのアブ・シール南丘陵遺跡の青色彩文土器の研究により、第18王朝中期のアメンヘテプ2世時代から第18王朝後期のアマルナ時代にかけて、製作技術が次第に簡略化することを示した。そして、そこから青色彩文土器の生産地の増加の可能性を指摘した。製作技術の簡略化により、それほど高い技術を持たない絵師・土器職人でも青色彩文土器が製作できるようになったと考え、生産地がそれまでの限られた場所から広がっていったと考えた。

本発表では、青色彩文土器の製作技術の研究から示された生産地の広がりについて、更に考察を進め、実際の出土資料から検討を行うこととする。青色彩文土器の生産遺跡がこれまで発見されていないことから、ある程度のまとまりで出土した場所が生産地を反映しているとし、製作に関わる「胎土」、「器形」、「文様」の3つの項目の比較を行うことで、同じ場所で生産されたのか、別々の場所で生産されたのかについて判断してみたい。

実際の出土資料を見てみると、新王国時代第18王朝後期のアマルナ時代以前では、サッカラ、テーベ、アマルナといった王宮のある中心地に出土が集中しており、王宮などの限られた場所で生産が行われていたと考えられる。一方、第18王朝後期のアマルナ時代より後では、カンティール、サッカラ、アビュドス、テーベ、エレファンティネなど、エジプト各地で青色彩文土器が出土するようになる。地域ごとに胎土、器形、文様を比較してみると、相違が見られることから、それぞれの地域で個別に生産されていたと考えられる。実際の出土資料の検討から、製作技術の研究から示した生産地増加の可能性は、ある程度の蓋然性を持つことが明らかとなった。

生産地の増加により、それまで王宮や王に関連する遺構などの限られた場所で使用されていた青色彩文土器が、より多くの人々や地方の人々にも使用されるようになったと考えられる。

アコリス遺跡出土の「結びの護符」

和田 浩一郎（國學院大學）

古代エジプトの護符といえば、石やファイアンスで製作された、神像や象形文字の形態を持つものがよく知られている。しかし古代エジプト人の生活の中には、より多様な護符が存在していた。王朝時代の呪術／医術パピルスを参照すると、亜麻布をはじめとするさまざまな素材に、結び目を作る処方が頻繁に現れる。結び目にはいくつかの種類があるが、病気の治癒や魔除けの護符として身につけることを想定したことがわかる。特定の目的のために製作されたこうした護符は、有機物を主体として作成されたこと、おもに集落で使用されたことから、出土資料の実例に乏しく研究が進んでいない現状にある。

近年、中エジプトのアコリス遺跡から、複数の結び目がつけられた環状の紐や、動植物起源の芯材に糸を巻きつけた遺物がいくつか出土している。本発表では、こうした出土資料が「結びの護符」である可能性について、呪術パピルスの記述や既存資料との比較を中心に検討してみることにする。またこうした護符が、使用された末にどのように廃棄されるのかについても考えてみたい。

参考文献

Borghouts, J.F., *Ancient Egyptian Magical Texts*, Leiden 1978.

DigitalHeka (<http://research.uni-leipzig.de/digiheka/index.html>)

Pinch, G., *Magic in Ancient Egypt*, London 2006.

Wendrich, W., “Entangled, Connected or Protected? The Power of Knots and Knotting in Ancient Egypt”, in Szpakowska, K. ed., *Through a Glass Darkly: Magic, Dreams and Prophecy in Ancient Egypt*, Swansea 2006, pp. 243-269.

末期王朝時代のエジプトにおける人体像のプロポーションに関する解釈について

安岡 義文（東京大学）

本発表では、第 25 から 26 王朝時代にかけて改変された人体像のプロポーションに関して、これまで主張されてきた複数の解釈を再検討する。このテーマに関して、これまで繰り広げられてきた数々の議論は、紀元前 1 世紀ごろにディオドロス・シクルスが記した人体の全高が「21 と $\frac{1}{4}$ に分割される」という記述に端を発している。末期王朝時代以前の人体像が、その足元から額上端までの高さを 18 分割するものであったことから、「端数」としての「 $\frac{1}{4}$ 」という分数を奇妙なものとして捉え、それをどのように解釈するかということに焦点が当てられてきた。その結果、E. イヴェルセン、G. ロビンズ、E. パーノフスキーらがそれぞれ複雑な解釈を提示してきた。これに対し、本発表では、末期王朝時代以降に作られた人体部位の模型や描画例で方眼格子の痕跡が残っているものを中心的に分析することで、K.R. レプシウスや H. ランケがすでに推測していたように、ディオドロス・シクルスの「21 と $\frac{1}{4}$ 」という数字を文字通り受け入れることが可能であり、既往研究の複雑な解釈を介せずに改変された人体プロポーションが簡潔に説明できることを示し、これまでの錯綜する議論に終止符を打ちたい。

古代エジプトのファイアンス製ウシェブティに関する新たな様式分析への一試案
—通称「キャンベル墓」（ギザ）出土のウシェブティからわかること—

田澤 恵子（公益財団法人 古代オリエント博物館）

本発表は、昨年（2017 年）の発表（古代エジプトのウシェブティ製作に関する一考察—Campbell Tomb 出土のウシェブティをめぐって—）後に実施された調査・研究の結果をふまえ、古代エジプトのファイアンス製ウシェブティの形式分類に関する一試案を報告するものである。

大量の出土件数に見合うほどには製作過程が明らかにされておらず、また工房址も殆ど確認されていないウシェブティ製作であるが、発表者はこれまで、ギザの通称「キャンベル墓」から出土したプセムテクのファイアンス製ウシェブティを一つのケーススタディとして、調査・研究をおこなってきた。このウシェブティは、報告書ⁱによれば出土時に 63 点確認されたものの、それらが一括して登録・管理されているわけではなく、現在ではそれぞれ別々に欧米の博物館・美術館に収蔵されている。発表者は一昨年以降、これらの資料を実見調査することで、その形態分析をおこなってきた。

その結果、これまでウシェブティ研究の一つの指標とされてきたシュナイダーの形式分類ⁱⁱの再検討をおこなうと共に、新たな形式分類項目の提示に向けて一つの試案を得ることができた。本発表では、昨年の発表時に課題として残っていた実見調査未了のプセムテクのファイアンス製ウシェブティ 3 件 4 点 (Liverpool World Museum, The Warrington Museum & Art Gallery, The Fitzwilliam Museum Cambridge（いずれも英国））の実見調査結果と併せて、その試案について報告する。

尚、本発表の一部は、平成 29 年度カメイ社会教育振興財団助成事業 B.博物館に関する国際交流に対する助成（事業名：館蔵資料「プセムテクのウシェブティ」（AOM2585）に関わる資料調査、及びその収蔵・展示について文化財保護の観点からの情報交換の実施）により実施された。

ⁱ Vyse, R. W. 1840. *Operations carried on at the Pyramids of Gizeh in 1837*, vols. 2., London: Moyes and Barclay.

ⁱⁱ Schneider, H.D. 1977. *Shabtis. An Introduction to the History of Ancient Egyptian Funerary Statuettes with A Catalogue of the Collection of Shabtis in the National Museum of Antiquities at Leiden*, vols. 3., Leiden: Rijkmuseum van Oudheden.

クルアーン 18 章 38 節と 34 章 27 節の「事柄の代名詞」について

榮谷 温子（慶應義塾大学）

「事柄の代名詞」 (*damīr al-ša'n*) とは、後方照応の人称代名詞の一種で、あとに来る文全体を指示する。昨年度の口頭発表においては、クルアーン 112 章 1 節の *huwa* に関して、凡そ al-Zamaḥṣarī の時代に、これが「事柄の代名詞」と認識されるようになってきたことを明らかにした。

Al-Ziyādī (2006) は、クルアーンで、「事柄の代名詞」が独立形人称代名詞である（ただし、突然を表す *idā* を伴わない）のは 3 例、すなわち、18 章 38 節と 34 章 27 節と 112 章 1 節であるとした。ちなみに、接尾形人称代名詞として現れる「事柄の代名詞」の例は 30 ヶ所に見られるという。

本発表では、クルアーン 18 章 38 節と 34 章 27 節に独立形人称代名詞 *huwa* の形で現れる「事柄の代名詞」を取り上げる。

最初のアラビア語文法書である Sibawaihi の *al-Kitāb* ではこれら 2 節についてはまったく言及されていないが、その他の (1) タフスィール、(2) クルアーンのイウラーブ解説、(3) 文法書において、この 2 つの *huwa* がどのように説明されてきたかを見る。

112 章 1 節の *huwa* と異なり、章の中途に出現するこれらに関しては、先行文脈に関してはあまり議論されていないが、先行文脈があるがゆえに前方照応の人称代名詞と解釈されがちではある。これらの *huwa* に関して、特に説明を加えていないタフスィールも多い。その中で、al-Zamaḥṣarī は *Tafsīr al-Kaššāf* で、双方を「事柄の代名詞」と説明している。

他方、イウラーブ解説の *Nukat al-ʿIrāb* では al-Zamaḥṣarī はこれらの人称代名詞に言及していない。112 章 1 節の *huwa* を「事柄の代名詞」と説明しているイウラーブ解説書でも、その他 2 つに関しては、特に説明をしていなかったり、あるいは第 2 の「主語」(*mubtadaʿ*) 等と説明している場合がある。

また、al-Zamaḥṣarī の文法書の Ibn Yaʿīš による解説 *Šarḥ al-Mufaṣṣal* では、34 章 27 節に関する記述はなく、18 章 38 節は言及されてはいるものの、*huwa* についての説明はない。

総じて、18 章 38 節と 34 章 27 節の *huwa* は、明確に「事柄の代名詞」と説明されることは少ないが、その原因としては、クルアーンにおける「事柄の代名詞」が接尾形人称代名詞として現れることの方が多いこと、そして、この 2 節には先行文脈があり、*huwa* を前方照応の人称代名詞と解釈することも可能であることが挙げられよう。

クルアーン正書法とラスム学の確立—マグリブ・アンダルス学派の形成を中心に—

竹田 敏之（京都大学）

ラスム学とは、聖典クルアーンにおけるアラビア語正書法と読誦にかかわる母音記号などの諸記号を扱う学問である。この分野は、東方アラブ世界で7～8世紀に考案された丸点による母音記号のドゥアリー方式と、「シャクル」の名で知られるハリール方式を基礎としつつ、11～15世紀を中心にマグリブやアンダルスの学者によって学問としての体系化が進められた。

このラスム学の基礎を打ち立てた人物として筆頭に挙げられるのが、コルドバ出身の読誦学者アブー・アムル・ダーニー（1053年没）である。ダーニーはクルアーンに特化した綴字法を5つの原理に分類し、用例の提示と解説を盛り込んだ『ムクニウ（納得の書）』を完成させた。また、丸点の打ち方やインクの色を使い分けなど、読誦に関する諸記号を詳論した『ムフカム（決定的な書）』を著した。ダーニー以降のラスム学は、この2つを典拠としながら発展したというのが定説となっている。

しかし、その具体的な発展の経緯についてはいまだ不明な点が多く、なぜ東方アラブ世界ではなくマグリブ地域（アンダルス、モーリタニアを含む）でラスム学が興隆したのかという基本的な問いから、刊本ムスハフ（印刷されたクルアーン）が普及する現代において、西方で確立したラスム学がどのような影響を与えたのかという現代的な問いに至るまで、研究上の課題が山積している。

本発表の目的は、こうした研究上の空白を埋めるために、ラスム学に関する主要な著作を分析対象にその枠組みと諸原理を整理し、学問領域の確立からマグリブ・アンダルス学派形成への史的展開を明らかにすることにある。発表では、主に次の3点を中心に議論を進める。

- 1) マグリブ地域への読誦流派の伝播とラスム学との関係
- 2) 書字板によるラスム教育の伝統と「書承」の重視
- 3) 刊本ムスハフの普及とラスム学の影響

より具体的には、1)については、マグリブ地域で普及しているナーフィウ読誦流派（ワルシュ伝承）とラスム学の関係について、ワスラ（連結）／イブティダー（開始）／ナクル（移行）の規則に注目しながら綴字と諸記号の仕組みを明らかにし、現代正書法との相違について考察する。2)については、マグリブとモーリタニアにおける書字板によるラスム教育を事例として、その学習法を取り上げる。3)については、サウディアラビアの王立印刷所から刊行されているマディーナ版ムスハフを対象に、マグリブ地域で確立したラスム学の規範がどのような影響を与えているのかについて検証する。

ラスム学の史的展開を明らかにすることは、現代アラビア語の正書法の解明にも深くかかわっている。本発表では、ラスム学の諸相を描き出すとともに、読誦学やアラビア語学の発展におけるマグリブ地域の貢献を明らかにすることで、現代アラビア語研究のための新たな視座を提示することを目指すものである。

クルド語クルマンジー方言のエザーフェと関係代名詞

村上 武則（京都大学）

クルド語には他の多くの現代イラン諸語同様にペルシア語で「エザーフェ」と呼ばれるものに相当する連結辞が存在し、被修飾名詞の性と数及び後置冠詞の有無に応じてクルマンジー方言では最大 6 種類の異なる形を持つ。この連結辞は歴史的には古代イラン語の関係代名詞に由来するものであり、後に疑問代名詞から派生した現代語の関係代名詞を別個に有しながらもクルド語クルマンジー方言のエザーフェは被修飾語を持たずに独立して、あるいは直接修飾を受ける語から離れた位置で「～のもの」、「～であるところのもの」といった関係詞句を形成することが出来る。これを発表者は「遊離エザーフェ」と呼び、ペルシア語と対比した場合のエザーフェの連鎖構造の明瞭性の高さやペルシア語の ke 節に対応する ku 節の使用頻度がクルド語クルマンジー方言において格段に低いことの原因となっていることを示す。本発表では現代クルド語においてもなお関係詞的用法を維持しているクルマンジー方言のエザーフェと疑問代名詞由来の関係代名詞 ku との用法上、意味上の棲み分け及び制約関係について、適宜ペルシア語とクルド語ソーラーニー方言との比較対照を添えて検討する。

書き言葉におけるペルシア語受身の出現様相—日・英・仏と比較して—

五十嵐 小優粒（国際医療福祉大学）

ペルシア語の受身は、先行研究で使用頻度が少ないとされるが、ある種の文体では日本語に劣らない頻度で使われる。本研究では、資料として文体の異なる小説文（英語で約62,000語）と条約文（英語で約7,800語）を用いた。そこから、ペルシア語・日本語・英語・フランス語の典型的な受身形（ペルシア語は、他動詞の過去分詞形+šodan）を抽出し、その使用数を調べ、出現様相の異なり方の原因を考察した。

これらの資料は、四言語間で内容が同一のものであり、共通した素材を比較することにより、言語間の差異を明確にする目的で選定した。各言語の受身の使用数を調べた結果は以下の通りである。

- (1) ペルシア語受身の使用数は、小説文と条約文の間で大差なかった。
- (2) 条約文では、他の言語よりペルシア語受身が極めて少なかった。
- (3) 小説文では、ペルシア語受身の使用数は日本語とほぼ同じで、英語と仏語の半数以下であった。

(1)～(3)の理由として、ペルシア語の典型的受身と周縁的受身（名詞/形容詞+šodan）の割合が文体間で大きく異なることが挙げられる。日常生活を描いた小説文では典型的受身の数が周縁的受身の数を上回る。一方、専門用語の多い条約文では、周縁的受身が多用されるため、その分典型的受身の数が抑えられると考えられる。この理由から、特に条約文のような硬い書き言葉では典型的な構文に絞って抽出すると、日本語以外の他の言語に比べて少なくなると推測できる。

なお、日本語は、特に条約文において無対他動詞が多用されるため、動作主を明示せずに使用する場合には、自動詞の代用として受身が使用されることが考えられる。英語とフランス語では、今回の調査結果から、小説文でも条約文でも受身の使用数が多いため、文体の違いによる影響を受けず、受身が使用されると言える。

本研究では、四言語間で抽出条件を同等にするため、小説文については翻訳本とその原作本を資料とした。そのため、翻訳の際の原語の影響が否めない点を考慮し、ペルシア語で書かれた翻訳ではない文学作品（短編小説と昔話）も調査の対象とした。その結果、英語やフランス語から翻訳されたペルシア語の小説文と同程度の受身の使用数であったため、本発表において、翻訳の影響については議論から外すこととする。

イランにおける「都市」を表わす語の変遷

春田 晴郎（東海大学）

本発表では、エラム時代・ハハーマニシュ朝時代からイスラーム時代初期までの二千年ほどで、イラン高原およびその周辺地域において「都市」を表わす語がどのように変遷してきたのかを考察する。前田徹の用語で言うところの「領邦都市」が社会の基礎単位をなしていたメソポタミア（や後のギリシア本土、ソグド周辺地域）と違って、イラン高原では必ずしも都市が基礎単位ではなく、「都市」一般にあたる適当な語が存在しなかったりする場合があることも念頭に入れて考察する。

ハハーマニシュ朝時代からパルティア時代までは「城砦」を表わす語が場所としての都市を表わす語としても使われていたらしい。ただし、ハハーマニシュ朝時代のバビロンやサルデイスといった主要都市は単に地名のみで記されているケースが圧倒的に多い。行為主体としての都市については、王朝アラム語の用例から類推すれば「州」にあたる語が当てられていた可能性がある。

サーサーン朝時代になると中期ペルシア語では州（シャフル）の都を表わす語としてシャフリスターンが使われるようになり、城砦を表わすディズも城市を表わしえた。ただし、細分化していく傾向があり、シャフルの中でシャフリスターンの占める位置がきわめて大きくなっているであろう例も出てくる。近年、アフガニスタンから出土したバクトリア語文書については、シャフルが「都市」と訳され研究が進められているが、やはりサーサーン朝の用例と基本的には同じで領域を指していたであろうことを推察する。ただし、シャフルは領邦都市の領域とも言える範囲であって、中心都市の比重が高かったと考えられる。

イスラーム時代の新期ペルシア語では現在のように都市をシャフルという語で表すようになる。この経緯を、前時代からの流れの延長として説明できる部分と不連続な部分とに分けて考察する。

サーサーン朝カット・ガラスに関する一考察

四角 隆二（岡山市立オリエンタ美術館）

我が国古代史研究において「サーサーン朝ペルシアのガラス」の用語は、カット・ガラスと等価なものとして扱われてきた。いわゆるローマ／ビザンチン・ガラスでは見慣れない、カット装飾が施されたガラス容器を「サーサーン朝ペルシアのガラス」と呼び習わしてきたと言い換えられるかもしれない。よく知られる正倉院蔵白瑠璃碗を始め、奈良県新沢千塚 126 号墳出土ガラス碗、福岡県沖ノ島出土ガラス容器片、京都府上賀茂神社境内採集ガラス片は特徴的なカットが施されており、深井晋司氏らにより伝イラン北部由来の類例が紹介されたことで「ペルシアのガラス」との理解が広まった。特徴的なカットを根拠に「ペルシアのガラス」と理解する背景には、サーサーン・ガラスは東地中海系ガラスの強い影響のもとに成立・展開したため、製作技術や器形などでは両者の区別しにくい問題がある。一方、比較対象とした伝イラン北部由来資料は大半が盗掘品であったため、サーサーン・ガラスの考古学的理解はほとんど前進しなかった。

近年、発表者らは大英博物館やアシュモolean博物館などに所蔵されるサーサーン・ガラスの考古資料化研究と成分組成分析を継続してきた。調査は古く層位や共伴遺物などは不明だが、北部～中部メソポタミアの遺跡を網羅した資料群である。このうち、カット装飾をもつガラス片に注目すると、正倉院タイプ円形切子碗が最も多くみられ、サーサーン・ガラスを出土するほとんどの遺跡で確認できる。円形カットには多様性が見られ、むしろ亀甲状に密集した資料はほとんど見られなかった。一方、沖ノ島タイプの浮出円形切子や上賀茂タイプの二重円形切子はキシュ遺跡での出土を確認できたにとどまった。キシュ出土ガラスは器形や装飾の多様性が認められることから、近隣でガラス容器製作工房及びカット工房が操業していた可能性を想定できる。

本発表では、サーサーン・ガラスの考古学的検討を行い、「国家的生産管理」などといった正倉院ガラスと伝イラン北部由来の盗掘品に導かれた、旧来の理解は当てはまらないことを明らかにする。合わせて、メソポタミアとイラン北部～コーカサス地域に分布するカット・ガラスの比較検討から、サーサーン・ガラスの流通を検討する。

境界を越える金属貨幣の実態—サーサーン朝ペルシアの事例を中心に—

津村 眞輝子（古代オリエント博物館）

本発表は、金属貨幣が国境を越える中で、どのように受容されたのかを、サーサーン朝ペルシア後期および初期イスラーム時代の事例をもとに再構築しようというものである。

3～7世紀に西アジアの広大な地域を支配したサーサーン朝ペルシアが発行したコインは、ドラクマ銀貨（約4gr）が中心であった。発表者はかつて本学会において、その出土例を分析し、1）サーサーン朝ペルシアの銀貨がヨーロッパから中央アジア、中国西域、東南アジアに至る迄広く出土すること、2）王朝滅亡後1世紀近くたつ出土資料にも多く含まれていること、3）周辺諸国および後続の初期イスラーム政権によってコインの様式が模倣されたこと、4）周辺諸国（諸民族）が、サーサーン朝ペルシア銀貨に自国の追刻印を押していたこと、等を報告した。そこから、サーサーン朝ペルシア銀貨が地域および時代を超えて活用されていたこと、また当時コインとして信用度が高かった可能性を導いた。

本発表ではさらに、サーサーン銀貨がかくも活用された大きな理由として、コインの「銀」という金属素材に注目する。古代メソポタミアでは早くから原始貨幣としてムギなどの穀物と同時に銀が広く利用され、その伝統のもとに前7世紀にいわゆるコイン（金属貨幣）が東地中海域で登場した。以来、西アジア、南アジア、中央アジアにおいては、銀貨と金貨が地域間の交易で重要な役割を果たしてきたことは、出土例および様々な記録、文書などからも伺い知ることができる。

本発表では、実際に東西交易で利用された銀貨が、サーサーン朝ペルシアの銀貨のみであったのかをあらためて問い直す所から始める。なぜならば、境界を超えて取引される際に、銀という素材が重視されているのであれば、サーサーン朝ペルシアの銀貨に限定される必要はないからである。逆に、サーサーン朝ペルシアの銀貨である必要があったなら、その理由が検討材料となる。また、サーサーン銀貨には「摺り傷、擦痕」が多くみられ、報告者はこれを何者かが銀質を確認した行為であると考え、現在国内外のデータを収集中である。新たな調査結果を報告するとともに、この習慣を持つ地域の限定について検証する。最後に、金属貨幣としてのサーサーン朝銀貨が領域を超えて利用される中で、どのように本来のコインとしての機能を失っていったのかについても考察したい。

ムグ山文書の言語的特徴

ベグマトフ アリシエル (京都大学)

1930年代にソグディアナの東部（現・タジキスタン西部）のムグ山からソグド語の世俗文書が約80点発見された。この他に、ソグド語の文書の殆んどがソグディアナ以外の地域、つまり新疆ウイグルや中国などから見つかった。それらは主に仏教、キリスト教、マニ教の宗教関連のものなどであり、漢文、シリア語、中期ペルシア語などから訳されたものである。一方、ムグ山の文書に記されたソグド語はソグディアナの地から見つかったという点と他言語を翻訳したものではないという点において注目すべきである。実際、いくつかの文法の様相がこの文書においてのみ観察される。この内、頻繁に観察される $\delta\beta r$ -「あげる」、 $\beta y r$ -「手に入れる」、「もらう」、「s-」-「取る」、「持っていく」、「 βr -「持ってくる」という動詞は出現環境が決まっていることが分かった。これらの動詞を扱った先行研究は見当たらないが、Livshits (1962, 2008)、Bogolyubov&Smirnova (1963) はムグ文書を全体的に解説している。下記の (1) と (2) の例に対する双方の翻訳を見てみる。

(1) ZKn xwprn ZY xwte'nk 'šwy 100 kpc $\delta\beta$ 'nkw $\delta\beta y r'$
 冠.GEN-DAT 人名 conj. 人名 二 百 容量単位 穀物 与える-OPT.2SG
 「Xūfarn と Xutčāne(?)に 200 カブチの穀物をを与えるように」 [A-3:4]

(2) rty 'st ZK srβyk xwyštk kw šδw s'r 'ywh ['z-y-h]
 conj. 取る-IMPF3SG 冠 地名 先生 PREP 人名 POST 一 革製品名
 「Sarvag の先生が Šaδ へ 1 つの革製カバンを持っていた。」 [B-1:3]

(1) については、双方の翻訳は概ね同じであるが、(2) のの翻訳は異なる。どちらも、「s-」を「取る」と訳している点は同じだが、受け取り手を表す（固有）名詞の直前、直後の前・後置詞の訳は異なる。Livshits (1962, 2008) はソグド語資料から「s-」-「取る」をそのまま採用しており、方向を表す前・後置詞「～に、へ」を「～から」と訳している。一方で、Bogolyubov&Smirnova (1963) は「～のために」訳しており、その訳に特に問題はないが、ムグ文書に使用されている「s-」の機能は考慮に入れていないと考えられる。本発表では、上述の「s-」と $\delta\beta r$ -を中心に、日本語の「持っていく」、「持ってくる」、「もらう」、「与える」に意味的に対応する動詞の違いについて、冠詞、前・後置詞、副詞に着目しながら、考察する。

法顕が巡礼した『陀歴』（ダレル）に至るパミールからの四つの道筋
—パキスタン北部地方 『法顕の道』 現地調査（1991 - 2015）—

土谷 遙子（本学会会員）

法顕は、降安五年（A.D.401）に、タクラマカン砂漠からパミールを越え、北天竺の『最初の巡礼地』である『陀歴』に至った『法顕伝』。北天竺にあたる現在のパキスタン北部地方で、法顕がパミールから直接ダレルに至った行程の現地調査を、24年に亘って実施した。そのルートは、タクラマカン砂漠よりパミール高原、カラコラム山脈とヒンズークシュ山脈の会合、パキスタン北部地方を経由して、ヒンドウラージ山脈地帯に位置するダレルに至る行程である。パミールとダレルを結ぶ幾つかのルートの相違は、パミール越えの峠の選択にある。本発表では通説と本研究で新たに登場した『ホラボルト峠ルート』との比較検討を行いたい。

通説は、ミンタカ峠／キリック峠路である。このルートではミスガール溪谷、フンザ路から最大の交易地、ギルギットを経由してダレルに至る。『法顕伝』の「パミールを越えて最初に訪れた国が陀暦」との記述に合致しない。法顕がギルギットを訪れた場合、佛教も隆盛したギルギットに言及した筈だが、法顕伝には、ギルギットについての記述はない。即ち法顕はギルギットを訪れていないと推測される。

ダレルに通ずる道を求めて、パミールの三つの峠道、即ち、イルシャッド峠、ボロギル峠／ダルコット峠、ホラボルト峠 ルートを調査した。イルシャッド峠のルートはチャプルサン溪谷から通説と同じフンザ路を経てギルギットに達していた。即ちミンタカ・キリック峠路に合流し『法顕伝』の記述に合致しない。他の定説路はボロギル峠／ダルコット峠を経る。玄宗皇帝の大遠征で高仙芝の『ダルコット峠越え』による大勝利（A.D.747）が『旧唐書』『新唐書』に特筆された。長く一般通路と考慮されたが、スタインがダルコット峠路はハンニバルやナポレオンのアルプス越えにも匹敵する難所と認め、本調査でも法顕の道ではない事が判明した。

ギルギット溪谷の支溪谷イシコマンのチャトルハンで、宗教指導者 Pir Kalam Ali Shah が指摘された『ホラボルト峠路』の現地調査で、パミールからカランバール溪谷、イシコマン溪谷を経てギルギット川左岸に、更に右岸域のガクッチ村、シンガル村、シンガル溪谷を経てダレルに最短距離で達する道の存在が判明した。現代この峠を越えて亡命したキルギスの王族の一族も取材し、ダレルに達する最適路であると確認した。中央アジアの入口で、八丈の木造弥勒大仏の巡礼地、陀歴に、法顕を導いた重要な巡礼路として『ホラボルト峠路』を提唱したい。

『隋書』倭国伝にみる謎の王朝の存在—日本の歴史から忘れ去られた王—

下山 繁昭（さいたま市文化財保護課）

原文：開皇二十年倭王姓阿每字多利思北孤號阿輩鷄彌遣使詣闕上令所司訪其風俗使者言倭王以天為兄以日為弟・・王妻號鷄彌後宮有女六七百人名太子為利歌彌多弗利無城郭内官有十二等。倭国伝から読み取れる謎の王朝の存在を隋書の倭王阿每多利思北孤(アリシコ) 阿輩鷄弥(オキミ) 王の妻鷄弥(キミ)太子利歌彌多弗利と記載された文書のわずかな痕跡である倭語でない響き、弗利に注目し当時の文献を調査して同一の発音の文書を見出した。高句麗訛りが読み取れる。

『梁書』伝四十八に晋永嘉乱(307年～313年)鮮卑慕容皝據昌黎大棘城元帝授平州刺史。句麗王乙弗利頻寇遼東鬼不能制。訳：晋の時永嘉の乱(307年—313年)鮮卑族の慕容皝は昌黎県の大棘城を任され、元帝は平州刺史を授けた。高句麗の乙弗利は頻繁に遼東を侵略した。しかし、鬼を制する事は出来なかった。乙弗利は時代が少し前の時代の人であるが楽浪郡を滅ぼした美川王である。国内資料では、湯殿山神社の由来に推古天皇元年(593)年崇峻天皇の御子である蜂子皇子の御開山と書いてあり蘇我氏の難を避けるため三本足の霊長の導くまに羽黒山に入り修行してのち湯殿山を開いたとある。三本足のカラスの紋章を持つ高句麗系の警護団がいたのではないか。蘇我氏の中に高句麗系の人がいて、当然蘇我の血を通して高句麗系の王朝が存在したことを暗示させる出来事である。高句麗とのつながりを歴史的に見ると仏教の師である慧慈がいる。来日は595年である。大事な次期天皇になる皇太子を他国の人が教育したのである。他にも推古天皇18年(610)年には雲徴が来日。『易経』『詩経』『書経』『春秋』『礼記』の五経を熟知しており墨・絵具・紙づくりを伝えた。墨と紙の製法は官人による統治の基礎をなした。支配層に高句麗系を支える集団が存在したと考えられる。高句麗からもたらされた三本足のカラスの紋章の源流と伝播を推理したい。鳥が靈魂を運び先導すると考えるのは古くはエジプトにあるが鳥は隼である。『山海経』『海内北経』の編(中国の戦国時代から漢代の作)に西王母は几に梯子て勝・杖を戴く其の南に三青鳥有り、西王母の為に食を取る。考古資料では陝西省西安市半坡遺跡出土の彩陶土器に三本足の鳥が描かれている。仰韶文化(紀元前5000年から3000年頃)の遺跡である。高句麗の広開土王の碑文に始祖の出自が記録されている。始祖鄒牟王之創基也出自北扶余天帝之子女河伯女郎剖卵隆世生而有聖徳：訳鄒牟王は高句麗を建国し、出自は北扶余であり、天帝の子で、母は河の神の娘である。卵から生まれ徳をなす聖人である。卵は鳥。鳥は太陽の連想で生命の誕生となる。日本の建国神話では天孫降臨となる。この思想は東アジアに流行した理念であった。日本は高句麗の学問僧を受け入れ高麗郡を設置する程であった。

資料：『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』石原道博編訳、岩波文庫；『梁書』古典研究会、汲古書院；『熊野八咫鳥』山本殖生、原書房；『日本書記上・下日本古典文學大系』岩波書店；『装飾古墳が語るもの—古代日本人の心象風景—』歴史博物館編；『中国古典文学大系8—山海経—』高馬三良訳、平凡社

アラビア語伝記史料における「ズインディーク」文人像の変遷
—叙述における主題としての「異端（者）」の機能—

田中 悠子（ロンドン大学 SOAS）

ヒジュラ歴 2-3 世紀はアラビア語文芸活動が最も隆盛した時代の一つである。後世に名の轟く多くの著名な詩人・文筆家らが活躍し、彼らの詩作・著作は早くから選集編者などによってまとめられ、それに伴ってそれら文人らの伝記情報もまた記録されてきた。伝記情報は各人物の人間像を端的に示すような逸話の集成として記載される他、年代記史料にも文人らの活動に関する言及が散見され、2-3 世紀に活躍した文人らに関するさまざまな逸話が今日に伝わっている。

一方、伝記的史料には著者による歴史の再解釈が表出し、年代毎の伝記の叙述内容を分析することにより特定の人物像の形成過程とその意義を歴史的文脈の中で捉え直すことが可能となることが、Cooperson [2000]¹ 等の研究によって指摘されている。しかし、文人の人物像について考察する際に、各時代や著者の立場によって変化する歴史解釈の中で人物に付された文脈が変遷していく過程を追うという作業は、未だ十分にはなされていない。

以上の点を踏まえ、本報告はヒジュラ歴 2-3 世紀に生き、ある種の異端的思想・言動（『ザンダカ *zandaqah*』）で知られた「ズインディーク *zindīq*」文人らの伝記的情報に着目する。ジャーヒズ *Jāhiz* (d.255/868) に代表されるような初期の詩選集を始め、イスファハーニー *Iṣfahānī* (d.356/967) の『歌書 *K. Āghānī*』といった様々な逸話を含む伝記集を用い、叙述内容の変遷を分析する。史料の中で「ズインディーク」と呼称される文人たちの活動領域は時に一致し時には異なっているにも関わらず、伝記的史料においては一括りの社会層として語られることが多い。本報告ではとりわけ叙述の中で文人らの異端性が逸話化される事例と、萌芽期の神学に携わる学者らとの関係が様々な形で示される場合とに着目する。これにより示されるのは、ズインディークの活動・思想内容が問題となるのは文人たちが生きた当の時代よりもむしろ後世であった可能性である。また、宗教的異端者としてのズインディーク文人のイメージが伝記・歴史叙述の中にどのように利用されていたかを示し、時代及び社会状況に応じて変容する不道德概念を反映するトポスとしての「異端」が叙述の中で果たした機能を再検討する。さらに、叙述の素材としての様々な逸話の断片が各史料間でどのように参照され、伝記的記述の再生産においていかにして新たな文脈に取り込まれていくかという史料編纂史の観点にも、新たな光を当てることを企図する。

¹ Cooperson, M. (2000). *Classical Arabic biography: The heirs of the prophets in the age of al-Ma'mūn*. Cambridge: Cambridge University Press.

アッバース朝期イスラーム社会における「性的倒錯者」

辻 大地（九州大学）

本発表の目的は、アッバース朝期のイスラーム社会において「性的倒錯者」とされた者を取り上げ、当時の性愛観念の一端を明らかにすることである。今回は特に、イスラーム法では禁忌とされつつも、史料上には多くの事例が確認される男性同士での性愛関係に着目する。当時こうした関係に対して、受動側の者が少年や奴隷などの成人男性とみなされない者の場合は、比較的寛容な対応がなされたと言われる。しかしそれが成人男性同士の場合は否定的に捉えられ、特に受動の立場での性交を好む男性は蔑まれた。

そうした者たちはムハンナス mukhannath やマアブーン ma'būn、バグガー baghghā'などと呼ばれていた。これらの語は何らかの区分に従って使い分けられていたと考えられるが、それがどのような区分であったかは未だ明らかでない。その区分を示す最たる例として、ブワイフ朝の宰相と伝えられる人物、アービー al-Ābī (d. 1030) が記した『散りばめられた真珠 *Nathr al-Durr*』がある。この作品は、全 102 章の中に様々な歴史的情報やユーモラスな逸話も収録する、当時の「最大のアラビア語百科事典」とも評される逸話集である。本書の第 14-16 章がそれぞれ、「ムハンナスに関する逸話」「ルーティー lāṭa に関する逸話」「バグガーに関する逸話」となっている点は注目に値しよう。ここからはアービーが、ムハンナスとバグガーを、何らかの区分に従って分類していることが窺える。またこの両者の間には、ルーティーと呼ばれる同性間性愛において能動側の者についての逸話が配置されていることから、これについても比較対象として留意する必要がある。

以上を踏まえて今回の発表では、『散りばめられた真珠』の第 14-16 章における各語の使い分けを中心に、同性間性愛にまつわる用語の用法を検討する。それによって、当時どのような者が、どのような理由で、どのような「性的倒錯者」として認識されていたのかを提示することができよう。その結果、まず受動側を好む成人男性は、病的で特異な性質を持つ特定のタイプの人物として認識されていたことが指摘できる。これは、能動側に立つ者については同性との性交という行為自体が問題視され、その者の人格自体は問題とならない点と対照的である。また、受動側を指向する者の中でも、ムハンナスについての逸話では、彼らの当意即妙さやずる賢さなどが強調され、性愛に関連するエピソードに限られない一方、バグガーにまつわる逸話は、基本的に全て性愛に関するもので特に彼らの受動性が強調されるエピソードであるという違いが明らかとなった。以上の検討により、各々が持つ特異な性質には種別があると認識されており、前者が広く職能なども含み込んだ呼称だったのに対し、後者は純粋に性愛における性質に主眼を当てた呼称であったと考えられる。

普遍史書としての『バナーカティー史』—『集史』の呪縛から離れて—

大塚 修（東洋大学）

イルハーン朝に仕えた頌詩詩人バナーカティー Abū Sulaymān Dāwūd b. Abī al-Faḍl Muḥammad b. Muḥammad b. Dāwūd al-Banākātī (1330/1 年没) が 1317 年に著した『歴史・系譜学に関する識者の花園 *Rawḍat Ulī al-Albāb fī Ma‘rifat al-Tawārīkh wa al-Ansāb*』(通称『バナーカティー史 *Tārīkh-i Banākātī*』) は、9 代君主アブー・サイード Abū Sa‘īd に献呈されたペルシア語普遍史書である。『バナーカティー史』は、ムスリム諸王朝の歴史だけではなく、「インド史」、「中国史」、「フランク史」といった非ムスリム諸王朝の歴史をも対象とすることで知られている。ただし、このバナーカティーが書き上げた普遍史書は、その 10 年ほど前に編纂された、「史上初の世界史」として名高いラシード・アッディーン Rashīd al-Dīn (1318 没) 著『集史 *Jāmi‘ al-Tawārīkh*』の縮約版にすぎないと評価されたために、その史料的価値はほとんど認められてこなかった。この評価は、19 世紀の西欧の東洋学者たち以降根強く、1348kh/1969/70 年にジャアファル・シェアールによる校訂本が出版された後も少しも変わっていない。

このような研究状況に鑑み、本報告では、『集史』の縮約版にすぎないという先入観から離れ、バナーカティーによる歴史叙述の特徴について、文献学的手法を用いて検討したい。まずはその基礎作業として、校訂本を作成したジャアファル・シェアールでさえ行わなかった、手稿本調査の成果を提示し、学術的校訂本出版のための見通しを立てる。そしてその成果に基づき、テキストを分析し、バナーカティーが、いかに多様な情報源を処理した上で、歴史を再構成していたのか、について考察する。そして最後に、現存する手稿本の数、および後世の歴史書における評価や引用を分析することで、その受容の過程について検討する。以上の作業を通じて、普遍史書としての『バナーカティー史』の独自性、そして、バナーカティーの歴史叙述が後世の歴史家に与えた、『集史』をも凌ぐ大きな影響を明らかにすることを目的とする。

ペルシア語文化圏の歴史叙述というと、どうしても『集史』を軸に論じられてしまいがちだが、その軸を一旦取り去ることで、歴史叙述の発展の過程を、より具体的に、より良く理解できるようになるはずである。

マフディーかく語りき—サイイド・ムハンマド・ムシャアシャアのマフディー自称論理—

角田 哲朗（京都大学）

本報告では、15 世紀半ばにイラン南西部フーゼスターンに地方王朝を樹立した自称マフディー（救世主）たるサイイド・ムハンマド・ムシャアシャア Sayyid Muḥammad Musha‘sha‘（1461 年没）が遺した宗教書『マフディーの言葉（*Kalām al-Mahdī*）』の分析を通じて、著者が如何なる論理に基づいて、自らをマフディーに擬していたかを提示する。

モンゴル侵攻後のイラン世界でマフディズムが著しいプレゼンスを見せたことは論を俟たない。とりわけマフディー自称者が断続的に登場した点がこの時代の特異な点である。ただし同時代史料や二次研究においては、彼らが擁した教条は理解しがたい「異端」として扱われてきた。サイイド・ムハンマドの思想で従来指摘されてきた極端な信仰を例示すると「第 4 代正統カリフ・アリーの神格化」・「12 イマーム派の歴代イマームの不死性」・「マフディー自称」などが挙げられる。これらは通常のイスラームの信仰からは逸脱するものであり、所謂「極端派（ghulāt）」との他称を与えられてきた。しかしサイイド・ムハンマドが信者を糾合して政権を樹立した点に鑑みれば、外部から異常視されていたこれらの信仰も一貫した内的論理を備えており、それなりの説得力・求心力があった筈である。しかし、先行研究では彼の異端的教条が列挙されるのみで、そのマフディー自称において、それぞれのテーゼがどのように関連していたかは明らかにされていない。本報告が示すように、上述した 3 つのテーゼがサイイド・ムハンマドのマフディー自称の論理に必須の構成要素を為している。

さてサイイド・ムハンマドの議論の基盤を為すのは、彼独自の人間論である。これは先に挙げた「アリーの神格化」に象徴されており、「本質（dhāt）」と「ヒジャーブ」という独特な術語で霊肉二元論が展開される。サイイド・ムハンマドはこの議論の上で、「マフディーのヒジャーブ」を自称する。

特に今回の報告では、サイイド・ムハンマドが、隠れイマーム（12 イマーム派における 12 代目イマーム・ムハンマド・ムンタザル）をマフディーと同定した上で、その代理としてのマフディーを自称している点に注目し、この前提のもと、以下のような論理構成を想定して分析を試みた。即ち、1) 隠れイマームのマフディーとしての顕現の否定、2) マフディーが代理人を必要としていることの証明、3) 自らがその代理人たることの証明、以上の 3 点である。

テキストに即してサイイド・ムハンマドのマフディー自称の論理を復元すると、彼はあくまでもクルアーンの章句に対する比喩的解釈（ta’wīl）に基づいた論証という形式を採っていたということがわかる。また彼は論証を行う際に、論理学・修辞学の用語・論理を用いており、自説の説得性に留意していたといえよう。例えそれが詭弁であったとしても。

マムルーク朝期カイロにおける施設経営の実態

久保 亮輔（一橋大学）

本発表は、マムルーク朝期カイロに設立されたマンスーリー病院の経営実態の一端を明らかにする作業を通じて、前近代イスラム史におけるワクフの社会経済的意義を再検討することを目的とする。

マンスーリー病院は、スルタン＝カラーウン（在位 1279-90 年）がワクフを通じて設立した施設であり、マドラサ（学院）、墓廟、マクタブ・サビール（寺子屋兼給水施設）が併設された施設複合体（complex）であった。カイロの中心地（バイナルカスライン）に位置するこの病院は、19 世紀まで設立当初の形で経営されていたと言われており、同時代人による記述も比較的多く残されている。

こうしたことから、マンスーリー病院については様々な観点から研究がなされてきたが、先行研究に共通する問題点として、設立時への関心の集中が指摘できる。病院設立という慈善事業がマンスーリー病院を最もよく特徴づける指標として認識され、結果として 13～19 世紀に亘る病院の経営実績の全体が慈善と結びつけて理解されてきた。しかしながら、かかる「大規模施設」の長期経営を可能としたのは何であったのかという根本的な問いに耐えうる基本的情報が欠如しており、そのことがマンスーリー病院を全体として評価する妨げとなっている。

こうした問題点を踏まえて本発表では、主に設立後の経営実態に関心を置き、マンスーリー病院をマムルーク朝の実体経済に位置づける。具体的な作業として、以下を予定している。まず、管財人職にかんする規定が 13 世紀（設立時）と 15 世紀で変容していることを確認する。次に、実際にマンスーリー病院の管理・運営に携わった人物を年代記や人名録などの同時代史料から網羅的に精査し、彼らと権力者との結びつきを明らかにした上で、経営指針の変化の背景をマムルーク朝の経済・財政事情と関連づけて考察する。そして、叙述史料を中心に施設財政のあり方を概観し、病院の収支構造をできるだけ具体的な情報（数値）に基づき検証する。かかる作業を通じて、病院の財政機構を実質的に支えてきたワクフがマムルーク朝において果たした社会経済的役割を検討する。

本発表では考察範囲をマムルーク朝期に限定する。1517 年にエジプトはオスマン朝により征服されるが、征服後における病院の経営指針の変遷については、王朝交代が病院を含む諸施設の管理・運営のあり方にいかなる影響を及ぼしたのかを検証した上で考察する必要があるからである。

マムルーク朝末期における有力アミールの昇進過程
—スルターン・カーイトバーイ治世期における政府要職就任者の経歴に関する考察—

手島 秀典（中央大学）

マムルーク朝(1250-1517年)は、マムルークと呼ばれる奴隷軍人の集団が排他的に支配層を担っており、チェルケス・マムルーク朝(1382-1517年)ではスルターンに解放されたマムルーク達が各々の主人の尊称を名乗って派閥を形成し、その中で有力となったアミールは次期スルターン位をめぐり派閥を単位とした権力闘争を展開したとされている。近年ではこうした派閥を中心とした政治権力の研究に、年功序列の風潮や婚姻関係、血縁関係といった社会的な結びつきという視点が加わり、より具体的な政治権力構造が明らかにされつつある。しかし、こうした研究はスルターンを中心に政治権力構造を論じることが多く、政権を支える有力アミールたちに関する研究は少なかった。

本報告はこうした研究成果を踏まえ、チェルケス・マムルーク朝のスルターン・カーイトバーイ(位 1468-1496年)の治世期を対象に、7つの政府要職就任者の経歴を調査し、カーイトバーイ治世期におけるアミールの昇進過程の検討をおこなう。長期政権を樹立したカーイトバーイの治世期には、先代のスルターンたちが遺した派閥とカーイトバーイ自らが形成した派閥が併存しており、世代の交代を確認することが可能である。これはマムルーク朝の派閥政治と世代交代による政治権力の変化を知る上で重要な意味を持つものと考えられる。

カーイトバーイ政権で政府要職に就いたアミールは24名いたが、彼らの昇進の経緯を出身派閥、婚姻関係、血縁関係という社会的な結びつきと対外遠征への従軍や主人への奉仕という実際の活動実績から分析する。そして、有力アミールがカーイトバーイ政権にどのように登用され、自らの政治権力を強めていったのか検討を試みる。

19世紀末イランの兵員簿の検討—イランにおける「軍隊の社会史」研究に向けて—

小澤 一郎（東洋文庫）

ガージャール朝（1796-1925）期の軍隊に関する研究はこれまで、ごく少数の例外を除いて主に同時代のヨーロッパ人の残した記録をもとに行われてきた。それらの研究は軍隊に関する基本的な情報を明らかにしているものの、近代西欧的な価値基準に基づいて記された史料の視点をそのまま受け継いでいるために、同時代のヨーロッパの軍隊と比較した形での「後進性」や、たびたび試みられた軍制改革の「失敗」といったような論点に偏重し、軍隊の性格や社会とのかかわりなどに十分な関心を払ってこなかった。

このような研究動向に鑑み、本報告ではアゼルバイジャン州東部ギャルムルド（現・ミヤーネ）を中心とする地域で徴用されたシャガーギー連隊についてヒジュラ暦 1308 年（西暦 1891/91 年）に作成された兵員簿の検討を行うことで、ガージャール朝期イランの軍隊の実態を解明する。現在イラン議会図書館に所蔵されているこの兵員簿は、兵員個人の身体的特徴や出自・家族状況、および軍歴に関する情報を表形式でまとめたもので、ヨーロッパ側史料には含まれない貴重な内容を含んでいる。

本報告ではまず、当時の軍事行政に用いられた帳簿類との比較からこの史料の特殊性と成り立ちについて簡単に指摘したうえで、①将校層の出自および兵員の出身地から連隊の地方名家による支配の実態を、②生業・家族構成・軍務期間などから兵員にとっての軍隊生活のあり方をそれぞれ分析する。そこで得られた情報を他のペルシア語史料—兵員調達について記された写本や官報・年代記など—の情報と比較検討することで、人員という、これまで先行研究ではあまり触れられてこなかった新たな側面から当時の軍隊の実態を解明することを試みる。さらに、ヨーロッパ史の分野で研究の進む「軍隊と社会史」の成果との比較を通じて、今回の検討結果の意味づけを行う。

本報告を通じて、近代西欧的な価値基準に則って組み立てられてきたこれまでの通説を見直し、当時のイランにおける軍隊のあり方を現地の文脈に沿った形で再検討するとともに、本報告をイランにおける「軍隊の社会史」研究の端緒とすることを目指す。

松浦家伝来渡来上着にみられるサファヴィー朝期織物について

阿部 克彦（神奈川大学）

平戸市の松浦史料博物館には、平戸藩主松浦家伝来とされる少年用渡来上着2着が所蔵されている。そのうちの1着に用いられた、青地に白で文様を織り出した服地には、その織り組織の特徴と意匠構成から、サファヴィー朝期のイランで製作されたと考えられる絹織物が用いられている。その裏地と、ほぼ同サイズのもう1着に用いられた表及び裏地の絹織物は中国で織られたと推測される。しかしながら、松浦家に代々伝来するものとして、具足類と同型の箱に詰められ同館所蔵庫に保管されていたことを除けば、所用した人物や伝来に関する史料は一切残されていない。

本邦に伝来する渡来織物の中には、インドまたはイランで織られたと考えられる、金属の撚り糸を用いたモウル（モウル織）と呼ばれる絹織物が含まれ、多くは後世に名物裂として主に茶の湯の道具に使用されたが、イランの織物が服地として衣服に仕立てられた例は、高台寺に秀吉所用と伝わる16世紀末のサファヴィー朝期の絹の綴れ織で仕立てられた陣羽織が伝世しているのみである。松浦史料博物館所蔵の上着は、同じく16世紀末から17世紀初頭に流行した当時のヨーロッパの上層階級の衣服様式をもって仕立てられているものの、用いられている布地には、16世紀末から17世紀初頭にかけてのサファヴィー朝イランで広く染織工芸や写本芸術などに用いられた文様が現れている。

本報告では、上着の仕立て及び布地の技術的特徴を分析し、さらに織り出された文様と意匠構成を検討することで、本上着とその布地について、産地と年代の同定を試みる。また、本邦に渡来した他のイラン産絹織物や、欧米のコレクションを中心に現存するサファヴィー朝期の染織品との比較考察を行うことで、本上着に使用された絹織物がイランの染織工芸史においてどのような位置付けが可能であるかを検討する。

また、上着の少年用と推定できるサイズや、同時代のヨーロッパにおける衣服の仕立てや縫製との関係を検証することで、もう一着の白地の綿布を用いた同サイズの上着と合わせてその製作地および伝来について考察する。

ネズィヘ・ムヒッディン (1889-1958) の論説に見る「トルコ人女性」

坂田 舜 (九州大学)

20 世紀初頭におけるトルコでは、女性の地位向上が主要な政治的主題の一つであり、当時の知識人・政治指導者たちは、「トルコ人女性 Türk Kadını」について、様々な見解を提示していた。例えば、オスマン帝国末期の代表的男性知識人であるズィヤ・ギョカルプ (1876-1924) は、古代トルコ人社会は男女平等的であり、女性もまた男性と同様の権利を有していたと述べ、トルコ人と女性の地位向上の「相性の良さ」を主張した。この主張は、同時代の女性知識人ハリデ・エディプ (1882-1964) や、さらには国家指導者アタテュルクの「忠実な娘」として政府と近い関係にあったアーフェト・イナン (1908-1985) にも受け入れられた。

この問題を検討するために本報告では、1920 年代に特に活動した女性知識人、ネズィヘ・ムヒッディンに着目する。彼女は女性雑誌への論説の寄稿や、1909 年の小説『失われた若さ』の出版など文筆活動を行っていた人物である。また 20 歳のときに女子師範学校にて教師として勤務した。1913 年のバルカン戦争の際には、戦禍によって貧困になった女性や児童のために援助活動を行ない、政治活動面では 1923 年設立の女性人民党、そしてその後継組織である 1924 年設立のトルコ女性連盟の指導者となった。また自ら雑誌『女性の道』(1925-27)の創刊者にもなっている。のちには、女性参政権を求めることを目的の一つとしていた野党である自由共和党に所属した。上述のハリデ・エディプとも交流があったという。

彼女の論説を検討した結果、ムヒッディンが「トルコ人女性」という語句を用いて主張する際、そのほとんどの場合、どちらかといえば一国民としての「トルコ人女性」、という意味合いの用いられ方がなされていたことが明らかになった。一方で民族としての「トルコ人女性」として用いられた例は、ほとんど見られなかった。また、彼女は科学的あるいは生物学的ともいえるような「女性の本質」に焦点を当て、自らの女性論を展開している。トルコ民族主義的言説と距離を置いていたことは、彼女の女性論の特徴と言えるであろう。

イスナードの定量的分析の試み

柳橋 博之（東京大学）

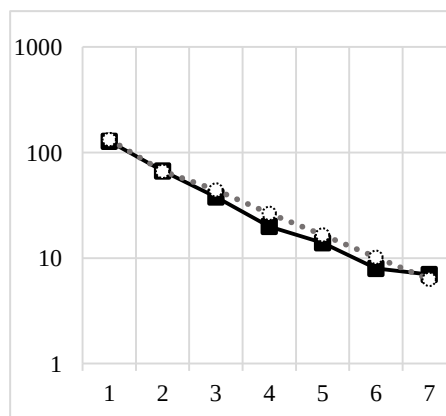
本報告では、58 のハディース群（発信者と内容から判断して、同一の起源を有すると考えられるハディースの集合）に含まれる 2018 個のハディースのイスナードを定量的に分析して得られた 2 つの結果について説明する。

(1) 特定の数のハディースを伝える口伝者の数

この 58 のハディース群のなかで、一つのハディース群のイスナードにのみ現れる口伝者の数 (T_1)、二つのハディース群に現れる口伝者の数 (T_2) 等々を調べる。対象を、ヒジュラ暦 111–210 (729–826) 年の間に没した口伝者のなかで 1 個から 9 個までのハディースのイスナードに現れる者（延べ数 311 人）に限ると、数列 T_n ($n = 1, \dots, 7$ 、右図の実線部分) は、 F_n をフィボナッチ数列として、

$$U_n = \frac{\frac{311}{F_n}}{\sum_{n=1}^9 \frac{1}{F_n}}$$

によって定義される数列 U_n (点線部分) によって良く近似される (n が 7 を超えると乖離してくる。図は対数

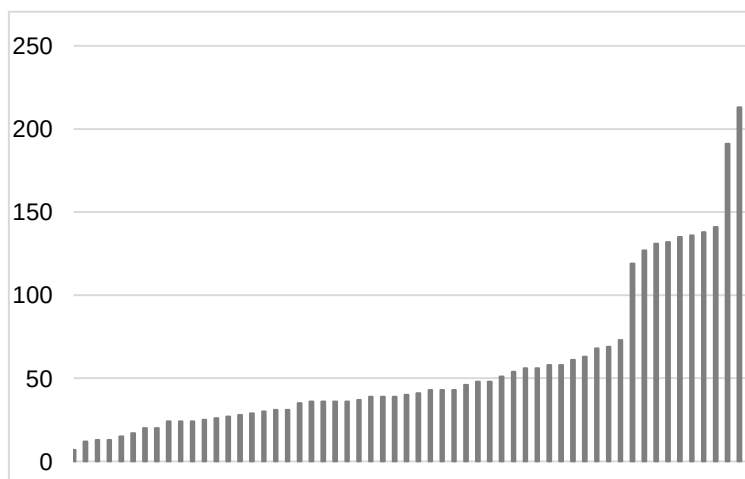


表示であることに注意)。イスナード中に現れる口伝者が、自分の弟子の弟子によって選択されるというモデルによってこの現象を説明することが可能である。

(2) 特定のハディース群のイスナード中に含まれる口伝者の総数

各ハディース群のイスナード中に現れる発信者と口伝者の数を数える。その数に注目すると、58 のハディース群は、

(1) 7~73 人 (47 個のハディース群)、(2) 119~141 人 (8 個)、(3) 191~220 人 (3 個) の 3 つのブロックに分かれ、2 つの断絶が認められる (左図参照)。口伝者数の経年変化を追うことで、この現象についても説明を試みたい。



アブー・ハニーファの『ムスナド』をめぐる論争と評価—ハディース学から見たハナフィー法学派—

Khashan Ammar (京都大学)

本発表ではイスラーム法学派の1つであるハナフィー法学の学祖アブー・ハニーファ(699-767年)のハディース集『ムスナド』を写本から校訂した作業をもとに、ハディース学と法学の関係をめぐって、同書の評価をめぐる論争について、考察する。

ハナフィー法学の学祖と知られるアブー・ハニーファが法学の典拠としてハディースをどのように扱ったかをめぐって、長い論争が彼の時代から現代に至るまで続いている。一般には、アブー・ハニーファはハディースより彼自身の解釈を優先すると「ハディースの民」によって批判され続けた。批判者たちはその根拠として「ハディースの典拠が乏しかったアブー・ハニーファ」と主張してきたが、それが歴史的に妥当であるかどうかを検証するためには、彼が編纂したとされるハディース集にさかのぼって研究する必要がある。本発表ではアブー・ハニーファの『ムスナド』を新たな写本から校訂した過程及び結果を紹介する。

この問題は、法学者としてのアブー・ハニーファがムジュタヒドとしての資格を持つかどうかということも関係している。つまり、ハディース学はムジュタヒドに不可欠であり、アブー・ハニーファが仮にハディース学の資格を有していないのであれば、彼は法学上のムジュタヒドとしての資格も不足していることになる。そうであれば、法学だけではなく、彼の全成果を誇ることになる。

ところがアブー・ハニーファが自らはなにも書き残さず、弟子を通じて成果を私たちに伝えた。アブー・ハニーファのハディース集を伝えたのは、弟子の中ではハーリシー('Abd Allāh al-Hārthī 871-951年)一人である。

そこでアブー・ハニーファにおけるハディースの位置づけを探るためハーリシーの写本のいくつかを参照し、分析しながら、考察を進めた過程を紹介する。

写本の確認と検証とともにおこなった研究と分析によって長所と弱点を発見した。そして弱点があればその原因を探究した。また、ハディース学の観点からこの『ムスナド』がハディース集の総体に対してどのような価値があるのか判断することも目的の一つとした。

したがって、本発表の具体的な流れは二つに分けて進めていく。まず写本から校訂した『ムスナド』全文について、具体的な校訂過程と事例をまとめて述べる。その次に校訂作業に基づいた分析並びに研究結果を述べる。

初期イスラーム法学における 12 イマーム派とスンナ派の学說的関係の一考察—選択権を中心—

堀井 聡江（桜美林大学）

スンナ派法学の形成期—12 イマーム派におけるイマーム実在期（7 世紀末～9 世紀末）にあたる—におけるシーア派法学の研究は、同時代の法学資料が殆ど現存していないこともあり、いまだ不十分である。だが、初期スンナ派法学史研究の方法を用い、同派の実定法との異同をその学說的起源に遡って比較考察することで、12 イマーム派法学が、後世のスンナ派四法学と一定の素材や法的伝統を共有しつつ、独自の法を形成した過程をある程度明らかにできるであろう。本発表は、その端緒にすぎないが、イスラーム法における契約締結の場の選択権（*khiyār al-majlis*）を中心とする選択権（解除権）について、学派成立以前のヒジャーズとイラクの学説対立に遡る 12 イマーム派とスンナ派の学說的相違を取り上げる。

契約締結の場の選択権とは、申込みと承諾の一致により売買契約が成立した場から両当事者が物理的に離れない限り、双方に認められる解除権を指し、メディナの学説に由来する。だが、マーリク派は、ハナフィー派に連なるイラクの学統と同様の解釈に従い、この解除権を否定するに至り、スンナ派四法学派ではシャーフイー派とハンバル派、および 12 イマーム派がこの解除権を肯定する。いずれの立場も、イブン・ウマル（73/692 没）が伝える預言者のハディース「売買契約の両当事者は、離れない限り、選択権をもつ。ただし〔約定〕選択権ある売買は別である」を主たる論拠とする。

もっとも、12 イマーム派の直接的論拠は、むしろメディナの法学権威であった第 6 代イマーム、ジャーファル・アッ＝サーディク（148/765 没）が伝えるこのハディースの異本と考えられる。これによると、売買両当事者は上記の選択権をもち、また目的物が動物である場合には、約定の有無を問わず、買主のみが 3 日間の選択権をもつ。同様の選択権は、メディナの一部の法学者が奴隷の売買に限って認めているが、瑕疵選択権の補充という趣旨は共通している。

約定選択権は、契約の中で当事者の一方または双方が約定により留保する解除権であり、その期間については、スンナ派四法学派の多数説は法源たるハディースに言及される 3 日間か、または必要な程度に限定する。12 イマーム派は、「ムスリムは自らの約定を守る」といった一般原則的な預言者のハディースを根拠に、任意の期間とし、上限を設けない。また、主としてサーディクに帰されるこのハディースの異本は、契約における約定に関する 12 イマーム派の規定にスンナ派法との際立った違いをもたらしている。

議論の場としての『医学典範』注釈
—クトゥブッディーン・シーラーズィー『サアドへの献呈書』—

矢口 直英（日本学術振興会特別研究員）

イスラーム世界における医学研究はイブン・スィーナー（Ibn Sīnā, 1037 年没）が頂点であり、その後の医学者たちは彼の『医学典範』（*al-Qānūn fī al-ṭibb*）に対する注釈を執筆することに終始した。そのため医学研究は停滞したと、古くは言われていた。このような見解は否定されてきているが、その実態は未だ明らかなではない。それら注釈文献はどれほどのオリジナリティを有しているのか。現時点では十分な資料が揃っておらず、注釈者たちが医学に対してどのような貢献をしたかを具体的に明らかにすることは困難であるが、焦点を絞ってその実状を明らかにすることは、遅い時代における医学の実態の解明に必要な一歩である。本発表ではクトゥブッディーン・シーラーズィー（Qutb al-Dīn al-Shirāzī, 1311 年没）が執筆した『医学典範』注釈『サアドへの献呈書』（*al-Tuḥfa al-Sa'diyya*）を題材に、イブン・スィーナー以後の医学研究の実態の一端と、シーラーズィーによる医学の定義論を明らかにする。

『サアドへの献呈書』は第一に、『医学典範』の本文についてその指示詞や難解な単語を解説するような、純粋なテキスト注釈の側面をもつ。また、前者の内容を医学的に解説する医学的解説書の側面も有している。しかしその中で、著者が序文で述べる通り、シーラーズィー以前に書かれた『医学典範』注釈やその他様々な文献が参照されて、『医学典範』の内容に関する彼らの議論が吟味されている。そこで言及される注釈書の中には、ファフルッディーン・ラーズィー（Fakh al-Dīn al-Rāzī, 1209 年没）、イブン・ナフィース（Ibn al-Nafīs, 1288 年没）、イブン・クッフ（Ibn al-Quff, 1286 年没）といった著名な人物のものがあ、り、それらは時に肯定的に承認され、時に否定的に批判される。この点において、『サアドへの献呈書』は単なる『医学典範』の解説書に留まらない。

『医学典範』冒頭の章である第1巻第1部第1教則第1章は「医学の定義」を扱っており、『サアドへの献呈書』の該当箇所ではイブン・スィーナーによる定義が分析され、その意味を説明する中で、定義についての著者の見解が述べられている。その随所でシーラーズィーはラーズィーが提唱した幾つかの議論 (*baḥṭh/mabḥaṭh*) に言及するとともに、それらに対する他の注釈者たちの回答例を挙げて、それぞれを批判している。シーラーズィー自身はラーズィーの注釈に対して否定的な評価をしているが、これらの箇所に関する彼の議論はラーズィーが注釈で述べた議論展開に大きく影響を受けている。また、シーラーズィーが言及する他の注釈者の議論からは、注釈者たちが他者の見解に対して互いに反応を示していたこと、その中で特にラーズィーによる注釈が中心的な役割を果たしていたことが分かる。『医学典範』の注釈書は単にイブン・スィーナーの見解を解説して再生産するものではなく、注釈者たちが医学を盛んに議論する場として機能していたと言えよう。

モンゴル時代の漢語イスラム医学書『回回藥方』の外科治療記述について
—第34巻金瘡門折傷門を中心に—

尾崎 貴久子（防衛大学校）

モンゴル時代におけるイスラム医学の東への伝播を示す唯一の現存資料として、イスラム医学の漢語翻訳書『回回藥方』（北京図書館所蔵）がある。この書は全36巻構成であるが、その大部分は散逸しており、現存するものは4巻（第12巻、第30巻、第34巻、下巻目次）のみである。唯一の先行研究である宋崑『回回藥方考釋』（2000年）においては、漢語音訳の薬品や薬剤名の解説がなされ、漢語音訳名のリストが編まれた。しかし、イスラム医学書との記述比較は、イブン・スィーナー（ラテン語名 Avicenna）（d.1037）の『医学典範』一書を対象としているのみで、記述部分の詳細な比較はなされず、類似箇所の指摘にとどまっている。

発表者は、すでに、『回回藥方』が、複数の中世イスラム医学書を引用元とする翻訳書であることを、イスラム医学者らの漢語音写名の記載（例：沙ト而撒哈里＝サーブル・ブン・サフル（d.869）、アッバース朝侍医かつ薬学者でもあったキリスト教徒医学者；阿不阿里撒納＝イブン・スィーナー、など）を手掛かりにおこなった、第30巻（調剤薬処方集）の調剤レシピの比較検討より、明らかにしている。

今回の発表では、第34巻の記述内容に焦点を当てる。この巻は外科論考であり、その内容は記載順に金瘡門、折傷門、棒瘡門、針灸門、湯火所傷門、治人齒所傷門である。調剤レシピ集成の第30巻と比べて、貼り薬類の処方はあるものの、論述部分が大半を占めている。そこで金瘡門の取箭頭刺簽類説凡傷損等および折傷門傷損類説凡傷損瘡等左筋上者并治法の論述部分の一文一文を引用元のイスラム医学書の記述部分と照合し、比較を試みる。この作業から、この書の漢文翻訳の傾向や構成の特質を見出し、編纂の意図をとらえる手がかりとしたい。比較するアラビア語文献としては、10世紀のマジュースィー（d.ca.982-994）（ラテン語名 Haly Abbas）の『医術の完全』、イブン・スィーナーの『医学典範』、同時代のコルドバの医師ザフラーウィー（d.1013）（ラテン語名 Abulcasis）の『医学詳解』を採り上げる。

西アフリカにおけるイブン・アラビー思想の影響に関する一考察
—イブラーヒーム・ニヤースの著作群を事例に—

末野 孝典（京都大学）

イブン・アラビー（Muḥyī al-Dīn Ibn ‘Arabī, 1240 年歿）は、後代のイスラーム神秘主義思想の潮流に絶大なる影響を及ぼした人物である。そして、このようなイブン・アラビーの思想的影響下にある思想家達を「イブン・アラビー学派」と呼ぶ。従来イブン・アラビー学派研究は、主としてトルコ・イラン・インドなどの東方イスラーム世界に属するイスラーム知識人達に焦点が当てられ、研究が推し進められてきた。その一方で、モロッコ・モーリタニア・セネガルなどの西方イスラーム世界で活躍したイスラーム知識人達を対象にした研究は、十分な検討が為されてこなかった。従って、本発表の目的は、従来等閑視されてきた西方イスラーム世界の中でも、特に西アフリカにおけるイブン・アラビーの思想的影響の一端を明らかにすることにある。

そこで、本発表では、20 世紀におけるセネガル出身の偉大なイスラーム知識人のひとりに数えられるイブラーヒーム・ニヤース（Ibrāhīm Niyās, 1975 年歿）の主著『封印であるアブー・アル＝アッパースの溢出に関して覆いを取り除くもの』（*Kāshif al-ilbās ‘an fayḍ al-khatm Abī al-‘Abbās*、以下『覆いを取り除くもの』）を軸に、彼の関連著作でもある『自足者の王の息吹』（*Nafahāt al-malik al-ghanī*）や『イスラームの三つの階梯』（*Maqāmāt al-dīn al-thalāth*）なども踏まえて以下の二点の内容を検討する。

一点目は、『覆いを取り除くもの』の内部で引用されている著作群を整理することで、イブラーヒーム・ニヤースがどのような先行イスラーム知識人達の著作から影響を受けているのか明らかにする。そして、イブラーヒーム・ニヤースがイブン・アラビーの主著『マッカ啓示』やシャアラニーの『宝石と宝玉』などの著作を引用している事実から、西アフリカにおいてもイブン・アラビー思想の影響は決して看過されるべきものではなく、西アフリカにおけるイブン・アラビー学派研究の可能性があると指摘したい。二点目は、イブラーヒーム・ニヤースの神秘主義思想の鍵概念である溢出（fayḍ）という語に焦点を当て、彼のイスラーム神秘主義思想が、イブン・アラビー思想に端を発する存在性（*wahda al-wujūd*）という術語は使用していないにせよ、イブン・アラビーの存在的流出論の影響を色濃く受けていることを明らかにしたい。

Bangladesh の呪術師—成巫過程における夢の役割—

齋藤 正憲（東日本国際大学）

発表者は Bangladesh において、呪術師 4 名に聞き取り調査を実施することができた（齋藤 2017a, 2017b）。ヒンドゥーにおける呪術師をパゴールといい、イスラームのそれはコビラージとよばれる。

コビラージ 2 名には、夢にアッラーをみたという共通点があった。ところで、イスラームの教義では、ムハンマドは「最後の預言者」であり、以降、神の言葉を受け取る預言者は現れ得ない（山折 2012: 98-99）。それでもしかし、コビラージ 2 名は、夢でアッラーと邂逅したとして、譲ることがない。またその語りを、周囲の村人たちも躊躇なく受け入れてしまうのである。

夢は、そのままでは意味不明であることがおおく、だから、夢の解釈技術（夢判断）が各地で発達したとされる（小口・堀 1973: 733-734）。不可解な夢を理解しようと、「靈魂の觀念」が生まれ、やがては、「アニミズム的世界観」へと拡大されていくのである。つまり、夢を尊ぶ感性は、ごく根源的なものといえよう。そんな根源的な感性が胚胎となって、「夢をみる呪医」が産声をあげたのだ。夢こそが、呪術と現実を架橋している。そんなふうに思われてならない。

そもそも「シャーマン化（成巫）」の過程において夢は、「幻覚」「幻聴」「幻視」となり、また、「定型的な諸特徴」のひとつとされる（佐々木 1996: 106）。否、誰でもがみる夢だからこそ、「幻覚」「幻聴」「幻視」以上に共感を得られやすいのではあるまいか？ 夢によってある種の「現実味」を与えられて、社会に存在することを許された呪術は、宗教の権威をも借用する。結果として、両者の深刻な相克は巧妙に回避されるのであろう。かくて、相反するようにもみえる呪術と宗教が、もののみごとに、共存をはたしてしまったのだ。

参考文献

小口偉一、堀一郎（監修） 1973 『宗教学辞典』，東京大学出版会。

齋藤正憲 2017a 「陶工、医者になる。」，『教育と研究』35, 17-25.

齋藤正憲 2017b 「コビラージ：Bangladesh におけるイスラームの呪術師」，
『埼玉学園大学紀要』17, 77-88.

佐々木宏幹 1996 『聖と呪力の人類学』，講談社学術文庫。

白川千尋、川田牧人（編） 2012 『呪術の人類学』，人文書院。

山折哲雄（監修） 2012 『宗教の辞典』，朝倉書店。

イスラーム王朝の正統性—古典的枠組みを越えて—

代表者 近藤 信彰（東京外国語大学）

企画趣旨

歴史学におけるイスラーム王朝の正統性に関する古典的な議論は、アッバース朝（750–1258）に至るカリフ論、セルジューク朝（1038–1194）からはじまるスルターン論を中心として枠組みが作られている。この枠組みには、マーワルディー（975–1058）に代表される法学者の理念の影響を見てとることができる。この問題を邦文で初めて本格的に扱った佐藤次高『イスラームの国家と王権』（2004）に示されているように、少なくとも、スルターンを名乗り、傀儡であれカリフを擁したマムルーク朝（1250–1517）まではこの枠組に大きな揺るぎはない。

しかし、少し違う地域、時代に目をむけると、この枠組みの限界が露呈する。オスマン朝（1299–1922）はスルターンなのか、カリフなのか、あるいはどこかの時点でカリフになるのか、改宗後のイルハーン朝（1256–1336）やティムール朝（1370–1507）はムスリムであったにもかかわらず、なぜ、カイロのカリフに全く興味を示さなかったのか。しばしば、カリフという語を自称として好んで用いたムガル朝（1526–1858）を、どう考えればいいのか。

これに対して、近年、特に海外の学界で、こうした古典的な枠組みを離れて、さまざまな角度から王権の表象を通じて、支配の正統化のありかたに迫る試みがなされている。太陽神信仰につらなるムガル朝の王権や、イスラーム神秘主義を利用してその地位を強化するオスマン朝君主の姿など、より自由に多角的にこの問題が論じられているのである。この最新の研究動向を踏まえて、イスラーム王朝が現実にはどのような手段を用いて自らを正統化しようとしたか、そのあり方を具体例に基づきながら議論するのがこの企画の目的である。

この企画で、とりあげるのは、①アッバース朝、②アンダルス、マグリブの諸王朝、③ポスト＝モンゴル期のペルシア語文化圏の諸王朝である。アッバース朝は古典的なカリフ論の中心であるが、法学者の手による統治論を離れることで、多様な正統化のあり方が見えて来るであろう。アンダルス、マグリブ地域は、アッバース朝の支配を受けていない地域であり、マシュリクとの相違点が興味を引く。ポスト＝モンゴル期のペルシア語文化圏の諸王朝は、カリフにこだわらない多様な王権の正統化をはかってきた。この3例を取り上げることで、古典的な枠組みに挑戦することができるだろう。

古くからの題材への新たなアプローチの適用と等閑視されてきた対象をめぐる考察を組

み合わせ、多様で豊かな歴史像を描くことを目指す。

なお、本企画セッションは、科学研究費基盤 A「イスラーム国家の王権と正統性——近世帝国を視座として」（代表：近藤信彰）の成果の一部である。

発表 1：亀谷 学（弘前大学） アッバース朝期におけるカリフ観の変容

アッバース朝初期から中期までを射程に、古典的なカリフ論とカリフ政権の実態を中心に展開されてきた近年のカリフ研究を踏まえながら、逸話集や王権論などの様々な史料が語るカリフ像の分析を通じて、カリフ観の変容について考察する。

発表 2：佐藤 健太郎（北海道大学） 西方のカリフ政権とイブン・ハルドゥーン

アンダルスやマグリブにおいては、10 世紀の後ウマイヤ朝とファーティマ朝以降、カリフあるいはカリフに類する称号を用いる王朝が数多く存在する。これらの事例を 14 世紀の歴史家イブン・ハルドゥーンのカリフ論ともあわせて、検討していきたい。

発表 3：森本 一夫（東京大学） モンゴル支配期以降のペルシア語文化圏における統治の正統性と政治的権威——近年の研究動向——

企画趣旨に記されている新たな動向は、モンゴル支配期以降のペルシア語文化圏における王権や統治の正統性に関する研究において最も顕著に見られる。本報告は、目立った盛り上がりを見せているこの新動向の紹介を目的とする。

岡島誠太郎の再評価

坂本 翼（アジア太平洋無形文化遺産研究センター）

銭廣 健人（長野県立大学）

岡島誠太郎は、大阪に生を受けた日本初のエジプト学者である。大阪大倉商業学校を卒業後、親戚のつてを頼ってロンドンへ留学し、帰国後、京都大学文学部史学科、同大学院を経て同大学講師、奈良女子高等師範学校教授を歴任したことがすでに知られている。しかしながら、このうちとくにロンドン留学については、第一次世界大戦前と同大戦後の二つの見解が存在しており研究者の間で意見の一致を見ておらず、出版された著作数にも誤解があるなど、我が国のエジプト学を理解する上で極めて重要な人物であるにもかかわらず、正確な情報が存在しなかった。本発表では、各地の図書館や奈良女子大学、旧制高等学校記念館（長野県松本市）で実施した資料調査、および、ご子孫との対話などを通じて浮かび上がってきた岡島の生涯や業績を再評価することで、我が国のエジプト学の成り立ちを改めて考えてみたい。

クフ王第2の船における舷牆と甲板梁・桁の構造と収まり

柏木 裕之（東日本国際大学）

山田 綾乃（早稲田大学）

クフ王第2の船保存・復原プロジェクト（代表：吉村作治東日本国際大学学長）は今年で部材引き上げ5年目を迎え、船体関連の部材が収められている層位に達している。とりわけ昨年度の成果としては、船縁に設置される舷牆と（げんしょう）、甲板を支える甲板梁と桁の発見が挙げられる。本ポスター発表では、実測調査成果を通して、これらの部材の基本構造の提示と、それぞれの部材各部材の収まりについて考察する。

舷牆とは、甲板の両舷に船長方向に渡された部材で、クフ王第2の船では甲板室と天蓋の両脇を沿うように設置される。甲板梁を収める櫛型の欠き込みはそれぞれ50ヵ所ずつ用意されており、間隔は1キュービット（52.5 cm）前後と揃っていた。また船体と舷牆を固定するために、短手方向にロープを通す貫通孔が数カ所開けられていた。全長が20mを超える舷牆は、船尾側約4分の1のところで2材を継いで作られており、継手と柄にも特徴的な仕様が見られた。その他にも、幅5 cm×高さ2 cmほどの小さな開口部をもつL字の貫通穴は、天蓋柱の固定と関係していると考えられる。

一方、甲板梁と桁は、甲板パネルの下部に設置され、それを支える部材である。船幅方向に渡される甲板梁は、先述した舷牆の欠き込みの数と、同じく甲板桁に施された欠き込みの数から、全50本で構成されていることが判明した。また取り上げられた甲板梁の形状から、長方形断面、凸型断面、そして幅広の3種類のタイプが使われていることが明らかになった。凸型断面の梁は、その全長と番付から、甲板パネルの境界に位置すると推定され、凸型の両肩にパネルの端を置くような構造であると考えられる（甲板梁の配列に関する詳細は本大会口頭発表第3部会—3にて報告）。また甲板梁の両端から一定の位置には、凸型断面の梁の場合は欠き込みが、長方形断面の梁の場合は舷牆と同等の幅で直線的に擦痕が残っており、ここに舷牆が嵌め込まれていたことが看守された。

甲板桁は舷牆とほぼ同じ全長をもつが、船首から約4分の1のところで継がれている点が対照的である。上部に甲板梁を収める欠き込みが施されている一方、下部は半円状に整えられていた。

ポスター発表では、以上の部材の特徴とその収まりを図解する。本成果によりクフ王第2の船の船体の規模（甲板全長と幅）が概ね把握され、今後は現在取り組んでいる舷側板の復元に発展する。

『埃及スーダン発見彩色土器の研究』
—京都大学総合博物館所蔵資料から—

関廣 尚世（公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）
Elgazafi Yousif Eshhag（National Corporation of Antiques and Museums）

京都大学総合博物館に収蔵されているエジプトコレクションは、主としてエジプト探査基金（Egyptian Exploration Fund）と英国エジプト考古学研究所（British School of Archaeology in Egypt）からの寄贈品で構成されている。日本初の考古学講座を開設した濱田耕作が、ロンドン大学の F. ペトリ（Petrie）に師事したことで、このコレクションはより充実したものとなった。

1500 点にもものぼるコレクションのなかには、上記 2 機関以外から寄贈を受けた資料もある。そのうちの 1 件が、本発表で取り扱う「埃及スーダン発見彩色土器」である。

2016 年刊行の目録で報告されているのは、J. ガースタング（Garstang）教授から 1916 年 5 月に寄贈されたとされる土器 21 点（破片 20 点・完形復元 1 点）である。破片 20 点は「各時代。Meroe, Sudan」とあり、完形復元の資料については「年代不詳。Sudan」とある。

そしてそれらの資料調査の際、新たに類似する土器片 18 点が存在することが明らかとなった。本発表では、これらの土器片についても検討を加え、先に報告された資料とともにその歴史的・学術的意義について詳述する。

《参考文献》

京都大学大学院文学研究科考古学専修・京都大学総合博物館編 2016 『京都大学総合博物館考古学資料目録 エジプト出土資料』京都大学総合博物館

村上由美子・横山操・関廣尚世 2018 「総合博物館コレクション研究〈3〉エジプト考古資料の調査 - 資料目録刊行後の研究成果から - 」京都大学総合博物館編『京都大学総合博物館ニュースレター』No.43 4-5 頁

エジプト、ルクソール、マルカタ王宮出土の青色彩文土器の X 線分析

高橋 寿光（東日本国際大学）

阿部 善也（東京理科大学）

古代エジプト、新王国時代第 18 王朝中期から第 20 王朝中期にかけて、青色を基調とする「青色彩文土器」が見られる。古代エジプトにおける青色は、銅を着色剤とする世界最古の合成顔料である「エジプシャン・ブルー」が知られているが、青色彩文土器の場合には、これまでの化学分析から、ナイル川流域ではなく、オアシス地域などで得られた原料（ミョウバン）を用いたコバルトが着色剤として使用されていたことが明らかとなっている。こうした特殊性から、これまで数多くの化学分析が行われてきた。

こうした中で、発表者も、これまで青色彩文土器の青色顔料の蛍光 X 線分析を実施してきた（Abe et al. 2009）。本発表では、2017 年度に新たに行ったエジプト南部のルクソールのマルカタ王宮から出土した青色彩文土器の蛍光 X 線分析結果を提示するとともに、これまで実施してきた分析結果をまとめ、青色顔料などの組成の変遷や地域ごとの特色についてまとめてみたい。

エジプト南部に位置するルクソールのマルカタ王宮では、早稲田大学による発掘調査が行われており、第 18 王朝後期のアメンヘテプ 3 世時代の青色彩文土器が発見されている。現在、東日本国際大学に所蔵されている 7 点の青色彩文土器の蛍光 X 線分析を東京理科大学にて実施した。

今回は青色顔料の原料であるコバルトミョウバンに含まれる金属元素の組成的特徴に着目し、これまでに測定したエジプト北部のアブ・シール南丘陵遺跡から出土した青色彩文土器と比較した。マルカタ王宮出土の青色彩文土器 7 点のうち 4 点については、アブ・シール南丘陵遺跡出土のものと組成的特徴が類似し、青色顔料の供給地が共通していたか、あるいは原料採取地や製法が同じであった可能性が示された。一方で、残る 3 点についてはアブ・シール南丘陵遺跡出土資料には見られない組成を示し、これらはアブ・シール南丘陵遺跡出土のものとは異なる場所で製作されたものであると考えられる。

参考文献

Abe, Y. et al. 2009: “On-site analysis of archaeological artifacts excavated from the site on the outcrop at Northwest Saqqara, Egypt, by using a newly developed portable fluorescence spectrometer and diffractometer,” *Analytical and Bioanalytical Chemistry* 395-7, 1987-1996.

京都大学総合博物館所蔵の古代エジプト資料

中野 智章（中部大学）

京都大学総合博物館には、今からおよそ 100 年前に英国のエジプト探査基金（Egypt Exploration Fund）や英国エジプト考古学研究所（British School of Archaeology in Egypt）などから寄贈された古代エジプトの遺物が 1500 点あまり所蔵されている。これは同大学の初代考古学教室教授濱田耕作がロンドン大学教授フリンダース・ペトリーの下で学んだことが縁となって京都に贈られたものだが、これまで資料は主に教育用に用いられ、情報の公開や研究は進んでいなかった。

この度、2016 年に初めての資料目録が同博物館並びに大学院文学研究科部考古学専修編集の下で刊行され、発表者は監修者として携わる機会を得た。本ポスター発表では、資料の概要と現在進められている調査や研究の状況、今後の課題についてオリエント学会の関連諸氏にご紹介させて頂くとともに、同資料の活用について論じる所存である。

主要参考文献

京都大学大学院文学研究科考古学専修・京都大学総合博物館（編） 2016. 『京都大学総合博物館考古学資料目録－エジプト出土資料』京都大学総合博物館収蔵資料目録第 1 号. 京都大学総合博物館.

T. Amijima (ed.). 2016. Proceedings of the International Symposium on From Petrie to Hamada – Egyptian Antiquities of Kyoto University. The Kyoto University Museum, Kyoto University.

エジプト、ルクソール西岸新王国時代岩窟墓の調査研究
—アル=コーカ地区における 2017 年度（第 11 次）調査—

近藤 二郎（早稲田大学）

河合 望（金沢大学）

柏木 裕之（東日本国際大学）

高橋 寿光（東日本国際大学）

早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）では、古代エジプト新王国時代の岩窟墓群の変遷を明らかにするために、2007 年 12 月からエジプト・アラブ共和国ルクソール対岸のネクロポリス・テーベのアル=コーカ地区において、第 18 王朝アメンヘテプ 3 世治世末期の高官ウセルハトの岩窟墓（TT.47）および周辺墓群の発掘調査を開始した。ウセルハト墓（TT.47）は、アメンヘテプ 3 世治世末期のレリーフ装飾のある大型岩窟墓であるが、1902～03 年にかけて、簡単な発掘調査が実施されたが、岩窟墓の正確なプランも残された碑文やレリーフなどの装飾も不詳のままで、その後、墓自体が厚い堆積砂礫に覆われてしまったため、100 年以上にわたり位置が不明となっていた。早稲田大学エジプト学研究所による発掘調査で、ウセルハト墓（TT.47）は再発見され、また正確なプランを明らかにすることができた。当該地区には、ウセルハト墓（TT.47）の大規模な前庭部を中心として、数多くの岩窟墓が存在している。しかしながら、厚い堆積砂礫に覆われていたため、未発見の岩窟墓が存在していることが想定された。さらに、これまで実施された発掘調査により、ウセルハト墓の前庭部の南側から KHT01 と KHT02（コンスウエムヘブ墓）が、前庭部北東部から KHT03（コンスウ墓）の 3 基の岩窟墓を新たに発見し、従来の当該地区における岩窟墓の立地に関して新知見を得ることができた。

本ポスター発表は、ルクソール西岸アル=コーカ地区の岩窟墓群の 2017 年度の調査概要および成果に関するものである。2017 年度は、2017 年 12 月から 2018 年 1 月、さらに 2018 年 3 月の 2 回にわたり実施された発掘調査および岩窟墓の保存・修復作業の概要と、その成果に関するものである。

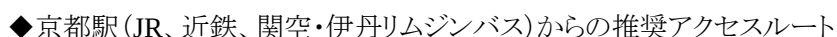
なお本研究は、科学研究費・基盤研究（A）海外学術（研究代表者・早稲田大学文学部・近藤二郎）、課題名「エジプト、ルクソール西岸の新王国時代岩窟墓の形成と発展に関する調査研究」、課題番号：15H02610 の助成を受けたものである。

エサルハドンとアッシュルバニパル治世における学者ならびに書記のネットワーク分析

伊藤 早苗（上智大学／ライデン大学）

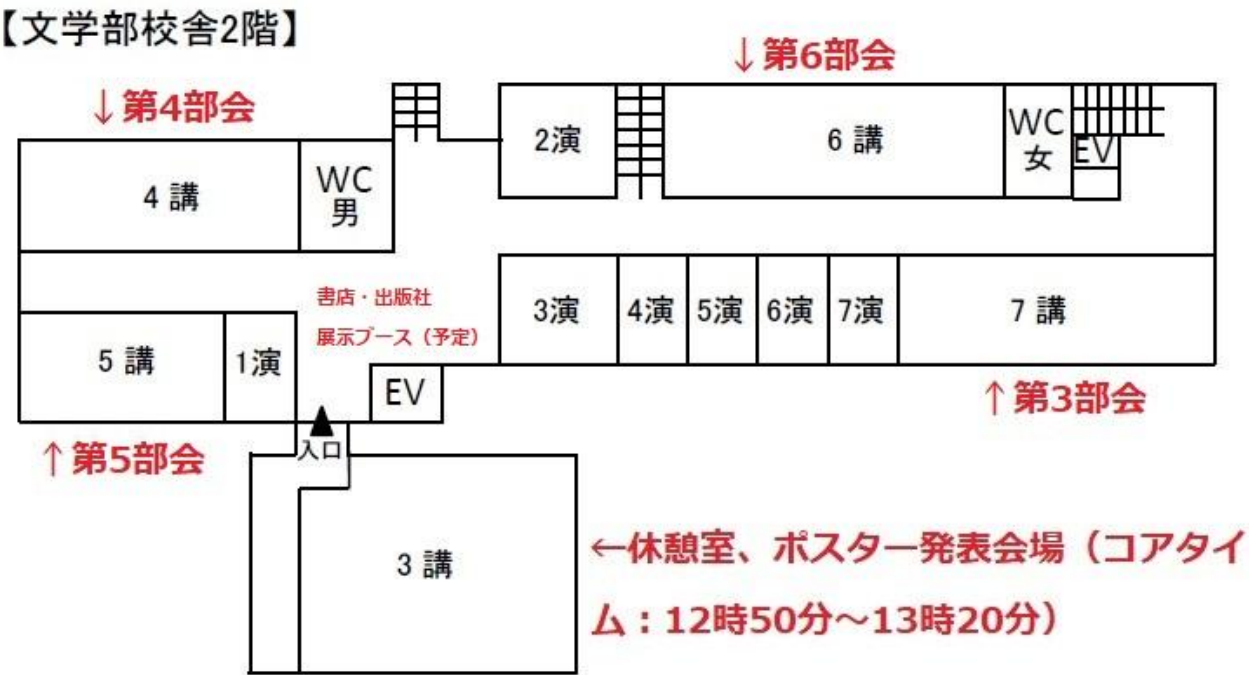
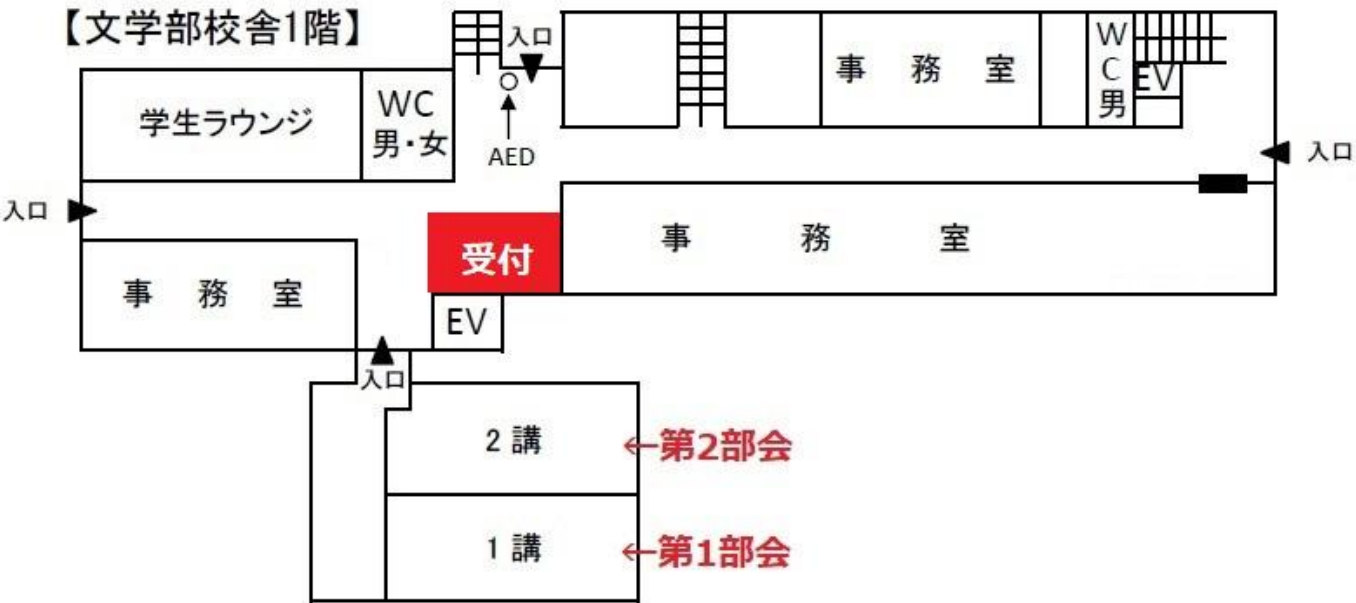
アッシリア帝国（934-612BCE）の帝国行政・文化における学者と書記の存在は、エサルハドン王（680-669）ならびにアッシュルバニパル王（668-c. 630）の治世の文書からよく知られている。書簡を用いた先行研究によれば、前者の治世に 21 人、後者の治世に 16 人の学者と書記が、これらの王に様々な助言をし国政や王の活動に影響を与えていた。更に近年の人物研究から、王宮における他の学者と書記の存在も知られるようになってきた。当該ポスターは、伝統的なテキスト分析と社会ネットワーク分析を組み合わせ、これら学者や書記らが、親族関係、職業、出身等を通してどのように相互に関係していたのかを復元する。

大会・公開講演会会場…文学部校舎、懇親会会場…カンフォール



※直通バス(京都駅烏丸口 A2 乗り場から **17** 系統「銀閣寺・錦林車庫」行きで「百万遍」下車、D2 乗り場から **206** 系統「祇園・北大路バスターミナル」行きで「京大正門前」下車、230 円)もありますが、観光シーズンの土休日は乗車待ち時間、渋滞待ちも含めて 40～60 分以上かかります)

《2 日目研究発表会 部屋割》





日本オリエント学会第60回大会実行委員会

委員長 東長靖

委員 井谷鋼造、稲葉穰、小杉泰、谷口淳一、長岡慎介、
堀川徹、吉田和彦、吉田豊(五十音順)

事務局 長岡慎介(事務局長)、黒田彩加(事務局長補佐)
〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学総合研究2号館
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長岡慎介研究室気付
E-mail: orient2018@asafas.kyoto-u.ac.jp

2018年9月30日発行 編集・写真協力©SN-Me